

# アスペラトウス雲



grasshouse



2010年「カ

プリチオ」34号掲載作品

朝方の天気予報では、午後から降水確率が高まるという。

湿気を含んだ重たげな大気が、どこまでもどんよりと澱んでいた。大きな銀色の魚の腹のような不吉な雲の群らがり。

いつのまにか油蝉たちが鳴かなくなっていた。どこか木立の下の地面にぽたぽたと落ちて、黒蟻たちに食われているのだ。

もう秋になるというのに、空を見上げると黄色味を帯びた曇天が広がっている。このところ何か厭な雲がのしかかるように、住宅街の上空に垂れ込めている。

野間育郎は、何食わぬ顔をしてトーストをぱくつき、ネクタイをいい加減に締めて、「じゃ、行ってくる」といった。

そして妻と娘の視線を避けるようにして、リビングを通り抜け、次に大小の段ボール箱が山積みになった狭い廊下をすり抜ける。

玄関では折りたたみ傘を鞆に突っ込んでおいた。空を見上げると、報道関係なのか自衛隊なのか黒光りする一機のヘリコプターが、のろのろと雲の下を昆虫のように這い進んでいた。布団を叩くようなぱたぱたという鈍い羽音が、ぶあつい雲の下に、憂鬱に響きわたる。

この夏の気違いじみた猛暑のおかげで、周辺の雑多な庭木がうちひしがれたようにぐったりと脱色していた。それは生命力あふれる夏への期待を裏切られた植物たちの失意の色のように思われた。

それでも秋になると、大気は鋭く目覚め、世界は一気に透明な冷えの底へと沈んでゆく。

私鉄の駅の階段を足早に駆け上がり、慌てて入った改札のところで、とつぜん腹部にきつく殴られたような鈍痛が走った。太く頑丈な機械の腕が飛び出して、入場を拒否されたのである。

—定期が切れていたのだ。

バツの悪い思いをして、数人の無表情な列の最後に並び、改めて切符を買った。大あわてで乗り込む。満員電車の中、ときに潰れるほどの圧力を背中に受けながら、情けない顔で窓に額をくっつけ、殺気立ったラッシュアワーをじっと堪える。列車はやがて憂鬱に車輪を軋らせながら新宿駅構内へと滑り込んだ。

野間育郎は、いつ失業したことを妻に言おうかと、幾日もくよくよと思い悩んでいた。妻の満子はテレビ通販に凝りだしてから、開けてもいない段ボールの山を廊下に築いている。ダイエツ

トのための健康器具、自然派化粧品、多機能式旅行鞆。スナック菓子ばかり食べて、このところますます陰気に太っていた。恨みや怨念を脂肪に変えているのではないかと思う。

部長に紹介された社内結婚で、最初はほっそりした美人だった。ところが中年になるとぶくぶく太り出し、おまけに彼を見下すようになり、今では夫への期待はずれの軽蔑が怒りに変わっている。職を失ったことは、まだ気づかれていないだろう。

しかし勤のいい娘の由香にはもう察知されているかも知れない。

十七歳の彼女は、赤いメガネをかけた友達のいない孤独な娘で、両親どちらにも似ていない。いかにも愛というもののなかった両親から生まれた子供らしく、潔癖で猜疑心が強く、情緒不安定な娘だった。幼い頃はよく夜泣きをし、夜尿症だった。

授業中に愚かな冗談を言う担任教師が気に入らない。馬鹿だ愚劣だなどといった、しょっちゅう学校を休んでいた。これでは生きていけない。それでも変に人間を見抜くところがあり、侮れないところがある。登校拒否気味のくせに、クイズ番組の問題はいち早く答えてしまう。父親ながら感心する。

毎朝、野間はニュースを見ながら、ネクタイをしめ、パンをくわえ、トイレに駆け込み、いかにもそれらしく出勤のふりをして、そそくさと家を出る。

駅の階段を昇り、電車に乗り込む。しかしその後はやることがない。息せき切って流れていた急流が河口に出た時のように、いったん速度を落とすのだった。

新宿や渋谷で二本立て映画を見たり、鳩を相手に公園でわびしく五百円弁当を食べて、長い長い昼下がりの時間を虚しく潰した。

その間に短かった木の影が、あちらからこちらへと伸びてゆく。どうでもいい。この世界は、自分のための世界ではないような気がする。わずか五歳のとき、育郎は、人々の集まりの中心人物には生涯ならないだろうと自覚していた。

ひそかに生まれて、ひそかに死ぬ人生。

それでも一日の終わりには、いつしか夕陽が風景を薄桃色に染めあげる。

「やっと、解放された！」

「さ、これからが本当の俺の人生だ」

などと、負け惜しみに呟いてもみる。

その実、まるで世界から一人ぼっちにされて、壁に額を押しつける登校拒否児童の心境だった。しかし彼のような無趣味な小市民には、仕事以外に人生を埋めるすべがない。天職、自己実現という概念がわからない。いずれにせよ会社をクビになったのだから、収入の宛はない。給料の振り込み日には家族にもばれることだ。思い切って街金にでも相談しようかと彼は思う。

ある日、駅のトイレの鏡の前で、野間育郎は自分がある動物に似ていたことを発見した。小学生の頃つけられた「かわうそ」という渾名が甦る。理科の時間、教育テレビの動物番組を見た悪童が、魚をくわえたかわうその姿が育郎に似ているということにつけた名だ。ライオンでも豚でも猪でもゴリラでもなく、かわうそ……。

猫背で物欲しげで小心翼翼とした小動物の自分の性格が、子供心にも見透かされたように思

った。中年になった現在も時としてショウウインドウに映っている自分の貧相な姿が、そんな小動物に見えることがある。この見窄らしい風采の中に、どれだけの失意が刻み込まれたことだろう。なるほど山手線の座席にかわうそが一匹ネクタイを締め、何時間も電車に乗っているのだ。

彼は電車の窓ガラスに白く貼りついた自分の笑顔にぞっとする。「ホホエミ鬱病」というらしい。それは何の確信もなく作り笑いを処世術として生きてきた偽の仮面の顔であった。

そうこうするうち、山手線に乗ることそれ自体が日課のように思われてきた。東京の中心で、メリーゴーランドのように回転する乾いた空虚。白い雲に青いハーフミラーのビル群。銀色のレールに乾いた茶褐色の石ころ。うらぶれた倉庫や錆びた貨物列車の風景にも、うら悲しくも閑雅な情感が漂っている。

この都心の虚無のサークル・ゲームは人知れぬオアシスのようだった。何に期待するでもなく、使命があるわけでもない。円環の内部に閉じこめられた行き先のない時間。そのリングの中で、彼の鬱屈はどろりとした青紫色の澱のように溜まっていった。憂鬱が粘液状の物質として彼自身を繭のように閉じ込めているのだ。鬱繭の中の醜い幼虫。葡萄色の鬱の液はすでに発酵し腐臭を放ち始めていた。

家族の前ではいそいそと出勤している演技をし続け、もはや山手線を巡ることが本職の仕事そのものとなった秋のある日、あの鷲鼻の仙人のような痩せた老人と出会ったのである。



ふと見ると、蜜色の車窓の光線を背景として、目の前に長い杖をついた老人が微笑している。老人は白髪をオールバックに撫でつけ、クエスチョンマークのような形をした特徴的なステッキを握っていた。眉毛まで白い。

隣には、孫のような七、八歳程の少女を連れている。その娘は、怪我でもしたのか頭部を厚い繻帯で巻いていた。いびつにふくらんでいるので大きな瘡蓋か、灰色のスズメバチの巣を思わせる。しかもアトピーで顔や首筋が爛れていた。繻帯で片方の眼が布で隠れている。これでは半ば子供のミイラだ。

老人は野間を見て微笑んでいる。ユダヤ人ふうの鷲鼻だが目は柔和であった。すべてわかっているとでもいいかげんな表情だ。

「よく、お会いしますな」と老人。野間自身は初めてののような気がした。

「昨日も、乗っておられましたな、新宿から。ずっと降りずに何周も何周も」

「失礼ですが、貴方は」

老人は改まったような顔を見ると、ゆっくりと立ち上がった。ぎくしゃくと前後に体を折りつつ、杖で前後を支えながら、こちらの座席にやって来た。老人を取られるとでも思ったのか、ミイラ娘は怒ったように野間を睨みつける。

「無礼なもの言いでしたかな。気になさらないでください。我々は過去は問いませんから」我々はといった。

「ふうむ。貴方の相を見ると」人相見や易者のように目を凝らす。「人生の道半ばにして、暗い森で迷っている……という状況ですか」

「暗い森？」

「ダンテですよ、神曲。ご存知ないかな」

名刺を渡される。

—「山手線環行会 代表世話人 越川英之輔」—

「野間育郎といいます。今たまたま名刺を切らせているもので」

「しかし、驚きましたな。私以外にもコレに気づいた方が、いらっしやるなんて。まことに貴方のように、無心に何回も廻るといことが、大切なのです。貴方は誰にも教わずに、そのエクササイズを実践している。天性の素質の持ち主と見ましたぞ」

「エクササイズ、ですか」

「そう。われわれはこれを環行内観法とっております。単純だが、極めれば深い行為となる。ある地理上の範囲を、ただ廻る。ひたすら廻る。魂と身体との微細な振動のズレ、隙間を作る。大切なのは雑踏と喧噪の中で、あえて無となりきることです。自我のないまっさらな状態だね」

「いや、私はただ、こうして」

「……いやいや、惚けなさんな。貴方はもう分かってらっしやる。内回りを極め、外回りを極める」老人は背筋をぴんと伸ばし「環行内観に二法あり。すなわち順行と逆行。内回りを千回、外回りを千回」と、抑揚をつけていった。

「ちょっと待って下さい。そんなこと、初めて聞きましたよ」

「お続けなさい、そのまんま。比叡山の千日回峰行のように。この単純な行を日々反復すれば、精神構造がある日一変します。私は嘘は申しませんぞ。意識と生とこの世界のカラクリが透けて見え、大いなる高次の意識が開けてくるのです」

妙な理屈だった。

目黒駅を過ぎた。いつもと同じ人の群れ。

しかし、老人のいうことに何かあるとするならば、野間育郎の無意味な毎日にも意味が生まれる。なるほどいわれてみれば、わずか一ヶ月足らずの間だが暇にまかせて何回も山手線で廻っているうち、何度か不思議な酩酊状態に入っていた。この虚無のメリーゴーランドに半日ほど揺られていると、三半規管が狂い出すのか、脳が船酔い状態になるのか、浮き足立った夢見心地の気分になる。人間や風景の实在感が脱け落ち、周囲は明るい虚無の中に入ってゆくのだ。

気がつくとも車輦の中にマネキン人形が乗っている。手摺りに交錯している白い腕。男も女もぎくしゃくとして血が通わない機械人形の群れのような。しかしよく見ると次の瞬間に彼らは生きて動いて喋っていた。ときとして、駅毎に乗り降りする他の乗客たちが無数の影のように見えてくる。影が影と重なり、ぶつかったり押し合ったりを繰り返していた。モノの本によればこれは離人症というらしい。

これをさらに意図的に極めていくと、老人のいうような変性意識に入り込み、妙な世界が見えてこないとも限らない。

二十年間、律儀に勤めた会社にクビを言い渡されて鬱病になりかかっていたところ、酒も薬物も使わないこの酩酊状態に逃避することで、現実を忘れていた。

このところ何社にも履歴書を送り、熱心に就職活動をしていたが、すべて断られた。もともとサラリーマンとして生まれてきた人間が、ある日を境としてサラリーマンでなくなると、何か他の動物や機械めいたものに似てくるらしい。

早くまともな勤め人に戻らないと、不定形のぐにやぐにやとした憂鬱がはみ出し、別の動物に姿を変えて、二度と人間という社会的動物に戻れなくなってしまうかも知れない。かわうそ化していた彼は、すでに並の人間の社員としては採用されなくなっていたのだろう。

以前同僚に、お前は流行りの「ホホエミ鬱病」ではないかといわれた。山手線の車窓に映っている自分の顔が、薄気味悪い仮面のように見えたことにゾツとした。この固い仮面。自分というものを本当につかんでいない偽りの顔。小心さと偽善のために世間の通行証として微笑んでいるだけの顔。四十を過ぎてもいまだに芯が見いだせない。自分の底がわからない。己があやふやで空洞化し、確信が持てるものが何ひとつない。

――野間育郎は、このような今の曖昧な心境を老人に話した。毎日の虚しい出勤演技にも行き詰まりを感じていた。彼はすぐ目の前の人に合わせる癖がある。話しているうち優しい言葉をかけられ、思わず涙ぐんだ。初めて出会った赤の他人に、一体どうしたことだろう、と彼は思った。このところ心が弱くなり、感傷的になりすぎている。

「実はねえ。何週間も前からメンバーの幾人かが、貴方のことを秘かに観察し、メールで報告してくれていたのです。こうして顔写真も届いている。彼はいつか私たちの仲間になるだろうと。貴方は選ばれた存在なのです」

ぼんやりと車窓を見ている野間の写真が、老人の携帯電話の中にちゃっかりと納まっている。肖像権の侵害という考えは、思い浮かばなかった。

「驚いておられますな。実は貴方が先日、ホームの下を覗き込んでおられたとき、もう限界だなと思ったのです。これはあちらから誘われているな、われわれの出番だな、と」

不思議なことをいうものだと野間は思った。

「この山手線に限らず、日本全国に、毎日どれだけの鉄道自殺者がいることでしょう」

一つ目少女は両手をふくらはぎの下に挟み、不満げな顔で正面を向いていた。赤いスカートをはいてお気に入りの小さなポーチを下げている。

「その供養をしなくてはなりません。そこを大事にしないから、世の中どんどん鬱病患者が増えてしまう、自殺者が連鎖反応で増加してしまう。これはヒトとしての義務なのです。あなた、ネアンデルタール人ですら、埋葬の儀式があるのをご存知か」

「いえ。何ですかとつぜん」

「何万年も昔の発掘現場で、死者に花をたむけた跡が調査されている。原始人すら、死者を悼む文化を持っていた。魂という文化です。死との正しいつきあい方です。……生と死とは表裏。光と闇も表裏。陰と陽も表裏。こんなことでは、やがて抑圧してきた闇の塊りが、何らかの大いなる天変地異となって、返ってきます」

「なるほど、ネアンデルタール人の花束ですか」

「信じても信じなくともよいのですが、私には少なからず、あまり見たくもないものが、見えてしまうのです。こうして電車に乗っている間にもね」

老人は杖を前に伸ばし、コツコツと床をつついた。「ちょっと、一子！ 他のお客さんに迷惑かけないように。そうそう。ちゃんと座る。そう、お利口だねえ」

寝そべっていた少女は面倒臭そうに姿勢を正してから、不満そうにほつぺたをふくらませた。

縋帯だらけの異様な少女に寄りかかっていたセーラー服の女子高生は、さっきから迷惑そうに肩をすぼめて、文庫本を読んでいたのだ。

「どうもこの子は、山手線が自分の家だと思っているらしい。典型的な山手線生活者ですな。…さて、轢死というのは、自殺の中でも最も悲惨なものなのです。これは死者の冒涇に聞こえるかも知れないので、あまり言いたくはないのですが」

老人は、クエスチョンマーク型の杖を立てて、意味ありげに目配せをした。

「ダンテの『神曲』によれば、インフェルノ、つまり地獄は先のすぼまった漏斗状の地層になっている。いちばん底の底がサタンの居場所だ。墮天使ルシフェルですな。そして自殺者は、自殺者の森という特別な領域に送り込まれます。私は、ダンテ研究者でしてね。アマチュアですが、幾冊かの著作もあります。

亡者は陽の当たらぬ鬱蒼とした林の中で、一人一人樹木に固定される。もはや樹なのか人間なのか分からぬ曖昧な姿となり、顔は幹に埋まり、手足は灰色の枝と化す。つまりダンテはただの詩人や文学者ではなくて、あの世が見えたのですな。幻視者のスウェーデンボルグやブレイクのように」

「私、難しい話はわかりませんが。そうすると、鉄道自殺というのはどうなるのですか」

「ダンテの時代に、鉄道はありません」老人は当前のことをいった。

「しかし鉄路に飛び込んだ死者の場合も、これに類する状態となり、樹木のかわりに、車輪や、赤錆びた鉄材に、固定されてしまう。痛い、辛い、冷たい、悲惨な領域に、たいへんに長い間、閉じこめられるのです。いまわの際の記憶がとても重要なのです。生き物は、その世界の物質を素材として身体を形成します。

まあ、毛糸を身にまとう蓑虫みたいなもんです。この世もあの世も同じ構造。悪しき死後の世界とは、悪夢を環境として、その内部で悪夢の身体を持つのですな。つまりは、世界と身体とは、二重の夢なのです」

営業マンや学生の座っている車内風景が、空虚な風景に見えてきた。

「あの、その場合は」野間は冷静さを装った。「どうやったら救われるのですか」

「うーむ。貴方は、よい方です。やはり見込んだ甲斐があった。然り、彼らはどうしたら救われるか。そこにこそ、私どもの使命があるのです。単純に思いを形に表すのです。いま、彼らの苦悩を思った、それだけでも僅かに、閃光のように通じます。ただ、誠を込めて行うには、一定の形の儀式がいる。セレモニーを行った方が焦点がぴったりと定まり、効果的なのです。

何万という乗客たちは、毎日のように駅を利用して、死者の存在には思いを馳せません。ほんのわずかでも、心の中だけでも、供養してあげればいいのに。ここに宗教、宗派は一切関係ありません」

老人はしばらく腕組みをし、瞑目した。

野間もなんとなく真似をして、目を閉じた。

「しかし生きている人間は、ただただ日々の生活を楽しむことと、金儲けのことしか頭にありやせん。重たい車輪の闇に沈んだ不幸な者たちのことは、思い出もしないのです。飛び込み自殺などあまりに恐ろしすぎて、考えたくもない、いっそなかったことにしてしまいたい。もはや、



言葉に出して触れることすら、現代社会ではタブーなのです。そんな荒涼とした世の中にしたのは、いったい誰ですか。激烈な競争社会のせいですか」

「たぶんですね。死ぬこと、自殺者のことを考えるのは、縁起でもない、不吉だ、運が悪くなると思うのですよ。現代で賞賛されるのは、ポジティブシンキングです」

「プラスとマイナスがあって、はじめて世界だ。生があって死がある。生と死とは表裏、陰と陽とは表裏。現代人は、押し込めていたあの世から、復讐されておる。

なぜ駅に線路脇に、供養塔がないのでしょうか。どういう理由で、プラットホームに死者を悼む花瓶が置かれていないのでしょうか」

「越川さんは、つまり新宿駅や東京駅に、供養施設でも作れとでもいうのですか」

「その通り、貴方は素晴らしい。当然です。メモリアルゾーンを作れ。供養塔を作れ。ホームの一部に亡くなられた方の名前を刻むのです。我々はこれまで何度も、JRや私鉄各社に掛け合ってきました。メメント・モリ。死を忘るべからず。

ところがあなた……轢死者などは弔わないでよろしいという反応だ。明言こそしませんが。陰惨すぎる。忌まわしい事実には、蓋を閉める。日本人の心は、これほどまでに劣化し、干涸らびてしまった。悲しいことです。恐ろしいことです」

沿線では白っぽい建物が続く。

「昔は、日常生活と幽冥界とが連続していた。そこには詩があった。薄明の領域が広がっていた。しかし現代は、死と生の部屋をぴつたりと遮断してしまう。襖を閉めてしまったのです。だから世界の真相が見えてこない。恐るべきマテリアリズムだ。私たちは目隠しされたまま屠殺場へと向かわせられる無知な家畜です。これこそ地獄の底に住む悪魔ルシフェルの陰謀ではありませんか」

「お話がとても現実離れ……いや、高尚なので、私にはどうも」

老人は、ふさふさした白い眉を動かすと、大きくうなずき、腕組みをして瞑目した。野間育郎も、あわてて真似をして目を閉じた。

「私たちの集会では、鉄道の沿線に固着してしまった彼らの魂を弔うことを、活動のひとつとしています。現在は東京だけで展開していますが、いずれ全国規模になるでしょう。最終的にはゼロ自殺社会。日本の年間自殺者三万人を、ゼロにするのが、私たちの目標です」

妄想だろうか。善意だろうか。しかし、この鷲鼻の老人に野間が感じたのは、反発だけではなかった。彼自身が、ややもするとプラットホームの下を覗き込む陰惨な心情に浸っていた。酸味のある暗い自己憐憫。いつのまにか気もそぞろに両眼をガラス玉のように見開いて線路を覗き込んでいるところを、不意に隣にいたサラリーマンにつつかれたりしていた。よほど陰鬱な顔をしていたのだろう。その初老の紳士はじっと彼の目を見て、穏やかに首を振った。世に善人はいるものだ。列車飛び込みは他人事ではなかったのである。

越川老人は、話を続けた。

「私は、いまは年金生活者ですが、バブルの頃に得た多少の財産もあり、もう何十年もこうして

山手線に乗って廻っているのです。それこそもう、JRが国鉄といわれた時代からね。ほとんど電車の中で生活しているようなもんですわ。セーヌ河やメコン河に棲みついている水上生活者、あれになぞらえていえば山手線生活者だ。死んだ婆さんも、最初はぶつぶついていたが途中で諦めた。とはいえ、何ゆえに毎日毎日、山手線に乗って廻ることが、心の修養、エクササイズとなるのか。それはひとつの神秘です。

内回りを極め、外回りを極める。順行、逆行。内回り千回、外回り千回。たんと吉野熊野の修験者なんぞのように励む。四国のお遍路さんみたいに精進する。こういうことはね、頭でいくら考えても、やってみないことには……やってみないことには、わからんもんですわア」

「深いものですね。そういう人生が、あるのですね」

「お爺ちゃん、お爺ちゃん」娘がもじもじと身を振らせて、立ち上がった。そっと寄ってきて、老人の耳元に口を寄せ「一子はね……したいの」といった。

「うんうん。もう少しだからね、待っててね。次の駅でね」

少女はスカートの前を、片手で押さえている。もよおしてきたらしい。

「日々こうして山手線で、環行内観法を反復していると、いつか脳髄も、全身の細胞も、少しずつ変質して、より微細な次元へと入り込み、ある日、世界が何か別のものに変容するのです。

私は、じっとそれを待っている。この道では私以上の専門家はいない。比叡山千日回峰行や吉野大峰の行者でいったら、私なんぞは、いわば大阿闍梨ですな。電車に乗るのではなく、電車を心の目覚め、魂の進化のために活用するのです。わずかですが、信奉者も増えております」

列車が揺れた。午後の黄色い光が差し込んでいる。中吊り広告が揺れる。目の前を大きな旅行鞆を引きずる外国人の家族連れが過ぎて行く。二人の金髪の子供が愛らしい。

この越川老人は、一種の変人だが悪い人間ではないだろう。それに妙に人なつこいし、野間は一緒にいて懐かしさすら感じていた。

車窓には、威厳のある白頭鷲と、情けないかわうその姿が並んで映っていた。

電車はやがて田端を過ぎ大塚に近づいた。越川老人は会合があるというのでそこで別れた。雑踏の中、大きく湾曲した杖を頼りに、前後に折れるようなぎくしゃくとした歩き方。祖父と片手を繋ぐ繻帯だらけのミイラ娘。

少女は帰り際にくるりと振り向き、スカートの前に片手をやりながら、鼻に皺を寄せ「イーダ」をやった。嫌われたらしい。

むきだしの桃色の歯茎に、銀色の歯科矯正の針金がのぞいていた。



起床は七時――。

朝はパジャマのままでベランダに並べたプランターの野菜に水遣りする。サニーレタス、胡瓜、ちんげん菜。僅かな黒土には涼しげな紫サルビアの花が鮮やかだった。

青紫色の小魚の一群が、緑の水槽を泳いでいるようだ。それは小さな癒しの坪庭だった。

出勤は八時前。八時半過ぎにはどうにか新宿に着く。ここまでは急いでいるふりをする。最近、妻の満子の様子が変わった。疑りぶかい目をして、怒ったように彼を睨みつける。押し黙ったままで、必要最小限の話しかしない。意図的に会話を短く終わらせて、残酷な楽しみに浸っているような気さえする。気弱になっているのか、彼女が心に飼っている赤黒い怒りが怖い。ストレスと欲求不満から買い込む段ボール箱は、狭苦しい廊下で開けられもせずに溜まってゆくばかりであった。開けるとがっかりするから、というのがその理由だ。それなら買わなければよいものを。ときおり嬉々として業者に電話でクレームをつける。どうせ対応するのは下請けのテレフォンセンターなのだが。昔から満子は、いつのまにか被害者になるのが得意なのだ。たまに一緒に食事をして、ぼそぼそと事務的な会話をする。終わるとすぐに、大きな冷たく硬い音を立てて食器を洗う。ときどき皿がわざとのように割れる。娘は帰ってくると、鋭い目を走らせながら、真っ先にパソコンのある二階の部屋に閉じこもってしまう。わが家ではそれぞれが自分の繭に閉じこもっているのだ。

野間は鞆をかかえ、犬のパロを撫でてやり、逃げるように家を出て、ほっと一息つく。この褐色の情けない仔犬は、ヨークシャーテリアに駄犬がかかって生まれた雑種を、知人から貰い受けたものだ。出自が卑しいためか、妙に人なつこく、いじらしいところがある。

新宿に到着すると、駅周辺の雑踏の中でぶらぶらして山手線に乗り込むか、近くのコーヒーショップで一服する。あるいは紀伊国屋書店で立ち読みして時間を潰すのであった。憂鬱で孤独な繭の中、空虚と倦怠が毒素のように沈着してくる。ショウウインドウの前で、最近、ますます自分の歩く姿が、かわうそに似てきたと思う。うつむき加減の前屈み、思考は鈍り、退化していくような気がする。

「山手線……環行内観法か。内回り千回、外回り千回」

老人の口癖を反芻してみる。冷静に考えてみれば、馬鹿馬鹿しい、ありえない、狂気じみている。聖地巡礼、四国お遍路、厳冬の瀧行、カトリックのサンチャゴ・コンポステーラへの旅。なるほど世の中には、そんなことに励む人間もいるものだ。しかしあの老人のいっていることは、由緒正しい伝統的な宗教行事とは違っている。資質があるといわれたのは、新入り勧誘のお世辞だろうか。とはいうものの、この灰色の絨毛でびっしり覆われた鬱の繭をこじ開けて、車窓の向こうに広がる澄んだ青紫色の空を目指したいと、ときどき思う。

野間育郎は、昼の新宿の雑踏を、鞆を抱え込んだ前屈みの姿勢のまま、あてもなくうろついた。空を見上げると水色の空に淡々とした翳雲がひろがっている。ひさしぶりの秋晴れだった。身になじんだ怠惰と空虚が黴のように生えるとき、ちょっとした自然の細部が、目に染みるほどに美しい。

少し色あせた木立の葉群には、金色の光がこぼれていた。桃色と青のだんだらに染まる斑模様の温かな地面。コンビニエンスストアで弁当を買って中央公園に行った。爽快な秋の大气。ついこの間まで猛暑だったのに、空気は落ち着きを取戻して透明に沈潜していた。

ベンチに腰掛ける若い社員とOL達。これから秋へと向かう爽々たる枝々の鋭さ。蒼醒めた高層ビルは、長方形の立体鏡のように翳雲を映し出していた。

鳩の群れが首を前後に動かして寄ってくる。割り箸を振ってご飯粒を撒いてやる。餌があるうちは鳩もぼつぼつと集まってくるが、餌が無くなってしまうと、どこかに飛び去ってゆく。人間と同じだ。中には最後の幸運にありつけるかと辛抱強く粘るいじらしい奴もいる。頸を片側に傾げて赤い目で瞬きをし、グググッと喉の奥で鳴いている。残った餌を与えるか与えないか、それは小さな権力だ。野間育郎は、群がる鳩に餌をまきながら、会社にいた頃を思い出した。

……二十年間勤めた職場だった。健康食品のOEM、および通販関係の会社で、都内と千葉、埼玉の三カ所ほど、配属が変わった。六月頃の職場の記憶が鮮明に甦る。

同僚とよく飲んだ飯田橋の店。ちょうど不景気のあおりを食ってライバル企業による吸収合併後のごたごたが続き、会社がひどく荒れていた時期だった。安っぽい居酒屋は焼き物の煙や白い蒸気が通りまであふれ、むんむんしていた。野間はその日も気弱な性格を同僚に攻められていた。

「なんでお前は会議の席で、そこをいわないんだよ。埼玉工場からの入荷数がでたらめだったのは、専務が横やりを入れて、あいつが途中で計画を変更したからじゃないか。言いたいことがあったらちゃんと言えよ。譲らないところは譲らない。結局、舐められてるんだ。情けないったらありやしない」

「野間先輩は人が良すぎるのです。糞真面目過ぎるんですよ」

「いいか、食うか食われるかなんだ。会社が合併されてから、奴らはますますやり方が露骨になってきた。そのうち俺たち、お払い箱になるのさ。あいつら将棋か囲碁でもやってるつもりなんだ。お前の二十年なんて、あいつらには何の意味もないのさ。奴らはクビを切る口実とタイミングを探っているんだ。まずは野間からやられるんだぞ」

「でも私なんか、そんなことをいえる立場じゃないしね」

「それぞれ。厭味いわれながら、そうやって作り笑いしている。それが駄目だって。野間さん、ホホエミ鬱病ってやつじゃないの。上海社員旅行の写真のあの情けない笑顔ね。最近多いらしいですよ。会社では気弱なサラリーマン、家族の前では内弁慶。そのうちどうしようもない鬱の塊を抱え込み、ある日ポキッと行ってしまう」

……もう聞こえない。聞きたくもない。生きていくことはこんなことの繰り返し……

公園のベンチの固い感触。回想から我に戻ると、こめかみを押さえた両手の中指に、異常な力

が入っていた。一羽だけ残って、首を傾げてきよとんと彼を見上げる鳩の目がいじらしい。

「俺に、餌を求めているのか」不意に凶暴な思いに駆られ、砂を蹴った。

「この俺に一」

やけになって、黒靴を前方に、放り投げた。砂埃がうっすらと、舞う。太陽光が淡い褐色に染まった。向こうのベンチで身を寄せ合っていたカップルが驚いて体を離れた。鳩はあわてて空へと舞い上がり、気分を切り換え翼を広げ、東の方へと飛び去った。

\*

翌朝のことだった。

例によって靴を抱え、出勤のポーズをして私鉄に乗り込み、新宿駅についた。構内に入ると、ひとつ向こうのプラットホームが騒然としていた。

小雨が斜めにぱらぱらと吹きつけていた。列車の遅れを告げるアナウンスが場内に響く。メガホンを通した声が焦燥感を帯びている。人々が鴉の群れのように殺気立っていた。腕を伸ばしてその場を仕切っているサラリーマン、悲鳴を上げる女たち。緊張が走る。こちらのホームのすぐ隣でひそひそ声が聞こえる。若者が不謹慎な冗談をいって笑っている。

また人身事故があったらしい。

長くて黒い担架が運ばれ、人混みをかきわけて進んでゆく。場内アナウンスの音がわんわん響いて、何をいっているのか分からない。色とりどりの傘を持った人ばかり。

野間育郎は、ひそかな戦慄を感じつつ電車を何台も見送った。急ぐ用事は特にない。いま、人間が一人死んでゆく。動かしようのない厳粛な事実が起こっている。

ビルの彼方、灰色の空から小雨が降っている。何もこんなもの悲しい空模様の日、飛び込まなくてもいいのに。

灰色の走馬燈のように、列車が停車し、また発車し、また停車した。

向こうのプラットホームは雨で煙って、はっきりとは見えない。レールにこびりついた肉片を、火箸のようなもので一片一片剥がして拾い上げるというのは、本当だろうか。電鉄からは遺族にどれぐらいの被害請求が来るのだろう。

制服姿の駅員や、救急隊員が階段の下を兵士のように走り廻っていた。外では救急車のサイレンの金切り声が、空を引っ掻くように響いていた。ビルの窓という窓が、雨空に向かって反射している。やがて数人の作業員や白衣を着た男たちが線路に降りた。大粒の雨が吹きつけコンクリートの柱に滲みた。

いまホーム下から、濡れた黒い紡錘形の塊が、恐る恐る持ち上げられた。目を凝らし口元をハンケチで押さえている利用客。さっきから見物していたのに、急に顔色を失い、その場を去っていく者。しゃがんだ女は嘔吐している。

喉がひりひりと渴く。轟音。悲鳴。天井の鉄骨が妙にはっきりと見えた。交錯する太い電線。しきりに軋る金属音。ぐるぐる廻る、ぐるぐる廻る。山手線内回りと外回りが逆行して爆音を響かせてすれ違う。どうせ他人の死。俺はまだ生きている。こう見えても幸せだ。好奇心でいっばいの顔。衆人環視の中、鋼鉄の車輪に巻き込まれて人生終了。おっと危ない。闇に向かう空想に

身をゆだねてはいけない。

野間は冷たい雨をうなじに受けながら、大きく深呼吸し身震いをした。



ひさしぶりに越川老人に会いたくなかったのは、一体どういう心境なのだろう。暗い森に彷徨う野間育郎は、あの穏やかな口調で何か言って欲しかったのかも知れない。

思い悩んだ末、教えられた番号に連絡した。すると翌日午前中から内回り路線に乗り込むという。

昼前頃に、時間にあわせて電車に乗るとあの二人が座っていた。長身瘦躯の白髪の人と、頭に縞帯を巻いた小さな女の子。病気がちの孫を通院させているやさしい爺さんに見える。何となく神父か牧師でも前にしているような気持ちになって、以前から自分を蝕む憂鬱症を訴えた。

家族には、失業を偽って毎日出勤をしているふりをしていること、公園で虚しく昼の弁当を食べていること、就職活動も希望がもてないこと、それらの秘密を隠すために家ではよそよそしくなってしまうこと、妻とは会話がないうこと、恨まれている気がする、娘には軽蔑され、無視されていること、それらが頭や胃袋を重苦しくさせること。特に先日のような生々しい事故現場を見ると、プラットホームの下からおいでおいでをされているようで、もう頭から離れない。山手線に近づくのをやめようかと思う、と伝えた。

越川老人はしばらく杖を両手で握りしめ、瞑目した。

啓示でも受けたのか大きく頷くと、せっかく成果が出始めているのにそれはよくないことだと老人は応えた。

「貴方には期待しているのですぞ」と老人はいった。

「私たちは、来るべき日に向かって、皆で協力しあって、意識を同調させねばなりません。その日のために、環行内観の順行観、および逆行観によって、山手線の遙か上空の想念界に、大きなリングを形成するのです。私たちのメンバーは、すでに見えない意識の雛型を作っております。心眼で見ると、いま東京の中心に、山手線と同心円状になっている大きな銀色の円環が現れています。その想念のフィールドを餌として、あの雲を呼び寄せるのです」

野間は、現実的な相談事をしようと思ったが、やめにした。

「あの雲……。お話がどうも抽象的で、わかりかねます。私は何というか、家族のこととか将来のこととか就職のこととか、つまり現実のこと、地に足がついた地上のことを伺いたいのです」

「いったい何が現実でしょう。世界の半分しか見えてないのに。死者たちとの関係が正常化していない以上、われわれ生者に本当の幸せはありません。この世は恨みをかっているのです。陰が極まっているのです。これはもう極限まで行って、陽に反転させねばなりません。あなたは、アスペラトゥス雲をご存じか？」

「初めて聞きます。なんですそれは。あの、空の雲ですか」

「奇怪なる姿をした巨大な雲です。一九五〇年代に発見された異形の雲で、その実態や原因はまだわからないのですが、現在、英国王立気象協会や、ナショナル・ジオグラフィックが注目しております。そもそもアスペラトゥスとは、荒れ狂った波というラテン語です。古代ローマの詩人

たちが、嵐の海を形容した言葉ですな。ちょうど荒海の怒濤のような雲海が天を覆う。

私はかつてこの雲を、ニュージーランドと中国大陸で、それぞれ目撃しました。中国では地元民衆は、天で悪い黒龍がうねっている、いよいよ共産主義政権の崩壊だ、哀号！ と怖れていました。何といえますか、あれは悪魔的というか、宇宙のゆがみの表れのような、世にも不吉な雲でね。暗雲とはまさにあの雲のこと。いわば黙示録的雲とでもいうべき異変です」

野間は口を半開きにしたまま拝聴しつつも、いささかとまどっていた。

老人の連れの少女はむずかるような顔つきで、銀色の手すりに腕を預けている。金色の光が、縹帯からはみ出した髪を透かせていた。ときおり頭の端を掻きむしるのは、皮膚と擦れた布地部分が痒いらしい。

「人の心の荒廃が生み出すアンバランスな現象は、いったいどこまで進むのか。異常気象やゲリラ雨、洪水、地震。一億総鬱病、一億総自殺体質、これらはじつに、悪意によって染められた想念界の穢れからくるものです。日本人そのもののアーラヤ識。……あなたアーラヤ識をご存知か。唯識仏教の言葉で、フロイト、ユングを超える深遠な心の領域ですぞ。ヒトが生き死にする業の種を宿す深層意識、生命の根源です」

「知りません。そんなこと知らなくても、生きていきます」

無然として彼はいった。

「この内奥の意識は、この世という夢の映写機でもある」

老人は独り言のように呟いた。

「しかしいま、現代人のアーラヤ識は、この根源の心の渦は、ごうごうと音を立てる奔流のように、荒れに荒れているのです。山手線や富士の青木ヶ原樹海など、人々を引きずり込む陰の気を、浄化せねばなりません。それが我々の活動のひとつでもあります。しかし、ついにはあの浄化の雲が到来するでしょう。なぜなら雲とは、まさに魂の投影だからです。

あなた、中国の気功の達人は、雲をまっぴたつに割ることもできるのですぞ。そのうち現代科学も、想念と水分子の相関関係を、確認することになるでしょう」

今日の東京は、低く垂れ込めた乳白色の曇天だったものの、さほどには荒れてはいない。

「なるほど穏やかな曇り空ですな。しかし、いまに必ず出現します。通常、アスペラトゥス雲は、大陸の広大な平原の上空に現れると考えられています。しかし私共は数年前から、この東京の山手線上空に、アスペラトゥス雲の初期段階の雲が出現しているのを、確認しています」

「それ、地球温暖化現象のひとつではないのですか」

「温暖化云々は、原子力推進派による世界的な策謀です。二酸化炭素を排出する石油や化石燃料から国際経済を脱却させ、一儲けしようという。まあ、石油系財閥と原子力系財閥の化かし合い。狐と狸で、どっちもどっちだ。……しかしアスペラトゥス雲の発生は、より深い人間の業のようなもの、マイナス想念の蓄積の結果なのです」

「でも、何か証拠のようなものは、ありますか。たとえば写真のような」

老人は、ふと思いついたように目をしょぼつかせ、おもむろに携帯電話を取り出した。うまく操作できない。ミイラ娘が見かねたようにやって来て、指を数回動かし、胸を反らして祖父に手渡した。

「や、ありがとう。一子はかしこいねえ」



少女は得意なのか、指で輪っかを作り、首を左右に振って、にこにこしている。やはり年相応に愛らしいじゃないか。野間は頭を撫でてやろうと、右手を伸ばす。一子は身を反らし、その手をひょいと避けた。そしてつんとそっぽを向いて、向かい側の席に戻った。

野間は少なからず傷ついた。

携帯を開く。新宿高層ビルの上空を渦を巻いたような不吉な銀色の層雲が覆っている。普通の雨雲よりも厚みと奥行きがある。次の写真は池袋周辺だろうか。厚い綿の布団を無理によじらせたような暗雲。次々と画像が開かれた。

「これがニュージーランド、まるで世の終わりの風景ですわ。中国で見たのは、どこに入っているのかな」

鯨の群れのような雨雲、砂丘のような雲海、逆さまになった乳房の連なりのような雲の群れ。珍奇にして異様な雲の画像を十数枚ほど見せられた。

「アスペラトゥス雲は、この地球の住人たちの心の病と、密接にかかわっているのです。一切は心の表れだ。あれは巨大な憂鬱、大いなる不安の塊なのですぞ。天は人間の意識の鏡。地上の悪意と憎悪と怨念が姿をまとい、いまや空を覆い始めているのです。人類の集合的無意識が、奇々怪々なる雲を生み出すに到ったわけです」

越川老人は、大きく溜息をついた。品川のビル群が淡い陽光を浴びている。

「昔はね、ほら、夕立はもっと夕立らしかったでしょう。ひとつぶり来るぞってね。雷はもっと情感豊かで、怪談めいていて、魅惑的だった。それは夏の風鈴や、朝顔や、雨蛙の懐かしい思い出と結びついていた。殺人的ゲリラ豪雨なんて、ありえませんでしたよ、台風でもないのに。

そう、台風には野分という雅やかな言葉もあったな。

……だからね、ほら、この列車に乗っている人々、プラットホームに突っ立っている連中、何ひとつ楽しそうな顔をしてない。不幸が眉間の皺になって刻まれています。ストレス仕掛けの機械人形だ。何とかしなければなりません。現代人は心の修養が足りないのです」

「そんなこといっても。どうすればいいのですかねえ」

隣の車輻から、広告担当の係員が現れた。白手袋の両手を伸ばし、中吊り広告を剥がし、新品の一枚と交換した。野間は、てきぱきとしたリズムカルな手捌きに、感心した。

「うまいもんだな……」老人も呟いた。「この東京は呪われています。まずは、おびただしい鉄道自殺者の霊を弔うことです。もはや目を背けたり、綺麗事をいつている時ではありません。われわれ生きている者が、山手線に固定された轢死者の心を鎮め、日々環行することで、彼ら哀れな魂を回向することです」

正面では、赤いスカートの一つ目童女が、監視するように睨んでいる。いささか気味が悪い。

「それでも、浄化と審判の日は来る。陰の気にひきつけられたアスペラトゥス雲がこの上空に忽然と現れ、すべてを過酷に洗い流した後、壮麗な彩雲が現れるのです。陰が極まって熟し切れば、陰それ自体の力によって陽へと変化する。闇が光となる。どんよりとした鬱感情のエネルギーは、大いなる光輝を孕んでいる」

老人は一息おいた。

「いつの日か、浄化の日が訪れる。東京そのものの奥に潜むアラーヤ識が満を持して、龐大なる

光の靈的粒子に変わり、唯識仏教でいうところのアマラ識に変化するのです。瀧の濁流のような阿頼耶識が、アマラ識に変容するのです」

越川老人は口の端を幾分痙攣させながら、宙の一点を睨みすえて喋り続けた。

「それこそがダンテが『神曲』の最後で描いた天国の白薔薇のヴィジョンです。宇宙的なロゴス、キリスト意識。そして、薔薇にはマリアの子宮の意味もある。つまり、墮落しきった宇宙の再生、リバーズです。これは薔薇十字団やグノーシス派の秘儀ですな。仏教的にいいかえれば、この薔薇曼荼羅、マリアの子宮とは、胎蔵界曼荼羅です。大いなる母なる御霊が雲となって、この汚濁した地上を洗い流し、涙と愛液とエクスタシーの浄化の中に、不浄のこの世を再生させるのです」

自分自身の言葉に陶醉するかのように、老人は野間の方を見返した。

「アスペラトゥス雲による浄化、それこそが新たなる希望です。それまでわれわれ日本人は、暗雲の下で必死に耐えなければなりません」

都会にはしばしば奇妙な愛好会が存在するのは野間も知ってはいた。けれども、新種の雲をオカルトまがいの発想と結びつけている人種とは初めて出会った。

少女はけだるそうに、座席の端にもたれかかっていた。疲れてきたのか、運動靴を下に並べて座席を独り占めにしている。やがて両手のひらを合掌するように愛らしく揃え、枕にして横になった。

「無邪気なものですな」心にもないお世辞だ。「お孫さんですか」

「ええ。孫にして愛人です」

「はあ」

野間は目をむいた。

「いや、冗談ですわ。妻が癌で亡くなった翌年に生まれた孫なんで、私としては、アレの生まれ変わりと思って、大事にして可愛がっているのですよ。実際、よく似ている。風呂に入ると、お尻のところに妻と同じ痣がありましてな」

白髪の老人は、鷹揚に微笑んで杖を撫でた。一子は寝そべった格好のまま、繃帯の下の大きな片眼を見開き、「ふん」といった顔をした。

電車が揺れた。いっせいに吊革も揺れる。少女は転げ落ちそうになった。

むっくり起きて「下手くそ」と、目をこすりながらつぶやく。「ちゃんと運転しろってば」と呟いてから、小さな体を器用にSの字型にまとめた。

老人たちとは新宿駅で別れた。野間はここで西武新宿線に乗り換える。

「何事も精進です。内観法の参加者は一人でも多い方がいい。上空の想念軌道が、ますますしっかりと、はっきりとしてきます。その銀色のリングを基礎として、新たな意識次元へと導いてくれる無限上昇螺旋が出現するのです。極地の壮麗なオーロラの如くにね。これぞ魂の進化への階段です。よろしければ貴方、またお会いしましょう」



内回り、外回り合わせて、そろそろ五十回は廻っただろうか。出勤ラッシュが済んだ後空虚なメリーゴーランドの郷愁。

車窓から洩れる秋の陽射しが薄く汗ばんだ首すじを照らす。

背筋をのぼして座っている自分の姿は、血の通わぬマネキンか蠟人形のように思われた。不安になるたびに越川老人に電話する癖がついてしまった。

「ほう……だいぶ貴方、変化してますな。ふむ。その調子です。迷わないで確信を持つことです。貴方には天性の素質があるのですから。環行内観に向いている体質なんて、めったにあるものではございません。必ずや、心眼に映し出されてくるものがあります。他の人に見えないような、この世とあの世のカラクリが」

野間はあやふやな笑みを浮かべる。無意味と意味の宙ぶらりん状態だ。

とはいうものの越川老人のいっていることがさっぱり理解できないので、彼は公立図書館に行って猛然と勉強を始めた。ダンテ、ブレイク、スウェーデンボルグ、エックハルト、プロティノス、旧約聖書。どれもこれも曖昧で神秘的で、大聖堂の古びたフレスコ壁画のようで、山手線を行き交いする膨大な乗客達とはまるで無縁な、それこそ雲をつかむような話であった。

「この世は、空の空なり。日の下に新しきものなし」

しいて挙げるなら野間育郎には、この旧約『伝道の書』の気持ちがぴったりきたかも知れない。山手線車窓に射し込む光線とまったく同じ太陽の光が、ソロモン王時代の褐色の岩山を、やはり虚しく照らしていたはずだから。

最近は、ときとして夜中まで電車の中に座っている。最終電車の茫漠とした情感の中、闇の中に点滅するイルミネーション。レールを滑る音、振動のリズム、それらの中に自分自身が焦点化し、一瞬、消失する。そこには意識の幾何学を解くような面白さが、ないわけではなかった。

越川老人は、魂の進化などと言い放つが、いまどきそんな観念に意味があるのか。世の中を覆う鬱々とした気分。雨雲の下の息苦しさ。すべてにおける閉塞感。都市を包む大きな大きな暗い繭。それを克服するにはひたすら山手線環行会の会員が心を寄せ、沈殿し過ぎた悪念を浄化しなければならない。ビルの壁にこびりついた悪意は、もう間もなく南シナ海や太平洋からやってくるあの怖ろしげな怪物雲を惹きつけるはずだ。悪は熟しきり、それ自体の力で善に転じ、闇は光に転じる。膨大な陰の気が極まって煮詰まれば、ついには臨界点を突破して、陽の力へと変化する。「すなわち、闇即光。陰即陽の法則、これなり」「自己破壊の心はそのまま、自己建設の力へと転じる。喝！」越川老人は、自分の妄想神学を、電話を通じて野間の耳元に囁いた。彼は力なく笑って聞き流す。そのくせ生きることの空虚に堪えきれず、ときおり老人と会いたがった。

一日中座ったままで瞑目し、車内の明るい空虚に堪えていると、ごく稀に入眠幻覚めいた奇妙な瞬間が訪れる。そんなとき野間育郎の脳髓の中心はますます澄み渡っていくのであった。鉄やジュラルミンやガラスでできた物質的山手線を透かし見ると、さらに内奥次元の幾何学的空間

へと入り込む。そこは美しい水色の湖面や氷上リンクにも似た、広大なる円形フィールドであった。天使をも思わせる先人達の想念のレンガで丁寧に整備されたその円形軌道は、一条の銀色の光芒を描いている。列車はもはや輝く星々と化し、等速度で軌道を循環している。魂はミズスマシのように山手線メリーゴーランドをくるくると進むと、やがてその回転力を元手として、肉体と少しずつズレ始め、無限上昇のスパイラルへと入ってゆく。そして遙かなる宇宙へ、アイデア界へ、根源の真空へと、吸い込まれる。そこには茫漠たる宇宙からの微風が吹き渡っていた。インフェルノと逆向きになった透明な漏斗状の構造が形成され、E・A・ポー描くところのメーレストロムの渦よろしく、内回り外回りの順逆二方向に、生命界の維持に必要な諸力の流出と流入を繰り返していた。環行中に入眠幻覚を自在に操れる者のみに開かれた、まだ誰も知らない世界であった。満員電車で押し合いへし合いしているサラリーマン連中ともはや自分は同類ではない。ましてや、かわうそや、機械や、マネキン人形でもない。こくりこくりと居眠りしていると、いつのまにやら、東京上空にふんわりと大の字の姿で浮かび、遙か下方に山手線を中心円とする暗い宝石箱のような夜景を見下ろしている鮮やかな夢をみた。

ほとんどの都民が知らない山手線の秘儀にうつつを抜かしていたら、野間家はとんでもないことになっていた。

「お父さん、いまお母さんの状態がどうなっちゃっているのか、知っているの」

遅い夕食の始まりに、娘の由香が切り出した。

「いや、最近話してもいないし」妻の満子の機嫌が悪いことは知っていた。このところロクに目すら合わせていない。隠し事がばれるのが恐ろしいので避けていたのだ。

「お母さん、奥の部屋に引き籠もってうんうん唸っているのよ。昨夜も布団の中でずっと独り言をいって」

「風邪だろう。季節の変わり目の」

「心を、病んでいるのよ」

娘がぼそりといった。野間は慄然とし、そっぽを向いた。

これ以上家族内で心の病を増やしてどうしろというのか。

奥の部屋を開いた。闇の中、白い花柄布団がこんもりと盛り上がっている。

「どうしたんだ。食事は済んだのか」

何かが動いた。「電気をつけろ」

手を伸ばして、スイッチを入れる。

ちり紙、新聞紙、ブラシ、タオル、底に薄くスープの残ったカップヌードル、ばらばらになった数本の箸。無惨な散らかりようが、しらじらとした照明の下に顕わになった。

「止めて！ 暗い方がいいの。その方が私にふさわしいわ」

満子が叫んだ。

「なんだって」

「真っ暗にしといて。この部屋の空気を吸わない方がいいわ。怒りで充満しているのだから。ぜんぶ私の吐いた毒よ」

「馬鹿な。意味がわからん」

「うちの家族は壊れているのだもの。私も、壊れてしまったのよ」

嗚咽が聞こえる。

「いいから、布団から出ろ。気のフレた真似はやめろ。みっともない」

「みっともないわよ。どうせ私は。出られないわ。布団の中でしか生きられない。この何十年間、私は病気よ」

「お母さん。ちゃんとお父さんと、お話してよ。いいたいこと、あるんでしょう」

由香はすぐ脇に正座する格好で、布団の中を覗き込んだ。

「働きたいのに働けないのだわ。パートでも何でも、やらなくてはいけないのに。プライドも世間体も棄てて。まだ家のローンも済んでないのに。由香ちゃんの進学のことだってあるのに。これからどうしたらいいのか、もうわからないわ」

無理矢理、布団をひっぺがした。そして蛍光灯を点ける。太った妻は胎児のように「の」の字になって、嗚咽を始めた。

「なんだ。知ってたのか……。俺は会社から用無しになった。みんな、用無し家族だ。登校拒否娘に無職の亭主。今度は、鬱病妻か。親も子も、心を病んだ敗残者だな」

野間はうっすらと笑った。「それにしても、通販マニアの買い物三昧が、よくいうよなア。物欲だけは人一倍に、健康なわけだ」

それにしても家族には、ずけずけと物がいえるものだ。自分でもあつけにとられる。冷たい蛍光灯で照らされた太ももに静脈が見える。黒い髪が海草のように乱れていた。

娘は怒ってキッチンに消えていった。苦い唾液がにじみ出た。

そのくせ喉がひりひり渴く。

「ところで……そのサングラスは何だ」

話題を変えようとして、快活な声を出し、野間はキッチンテーブルについた。

食器棚の脇に、洒落たサングラスが置いてあった。

「私のよ」由香が冷ややかに答えた。

「ほう。ハリウッド女優みたいじゃないか。セレブってやつか」

娘の舌打ち。野間は冷蔵庫を開いて、缶ビールをあけた。

「うんざりだわ。相変わらずデリカシーがないのね。お母さんは、人の心の分からないお父さんのことを、ずっと我慢してたんだって。外ではまるで内弁慶のくせに、家では暴君。冷酷で我儘。仕事熱心だけが取り柄のつまらない男をね」

「仕事熱心……笑えるな。もっと言ってくれよ」

しばらくの沈黙。娘の日記を覗き見して以来、彼は卑屈な気持ちになっていた。由香が父親をどう考えているかわかったからだ。

娘は立ち上がり、後ろ向きになって、皿を洗い始めた。両肘が、面白い形で動いている。

「あのサングラス、変装用なの」

「なんだと」

「私、お父さんのこと、尾行してたの」

ビールを、ごくりと飲み込んだ。

「こないだの、水曜日と木曜日。愕然としたわ。何やってるのよ、山手線に一日中乗って。それも何周も何周も、乗ったまま。信じられないわ。不気味だった。薄笑いを浮かべて、ほとんどイッチャッタ人ね。あれは酔っぱらいか、薬物常用者の顔だわ。それでいて、病気なのかと思うと、そうでもないのね。これが自分の父親なんて。家ではお母さんが、あんなになっているというのに」

野間は、天井を見た。

「つまり……。これは難しい話なのだが、ある人と出会ったんだ。それで人生というものを、根本から考え直した。この世とあの世の関係こそが……。いや、つまりだな、少しでも父さんは世の中のために」

「何いってるのか、わからない」娘は汚れた布巾を、思い切り投げ捨てた。そして指で赤いメガネをずりあげると「お父さんの言うこと、意味不明よ」

そして、「意味不明、意味不明」といいながら目尻を拭って、奥の部屋へ去っていった。「最低！ こんな生活無能者が、自分の父親だなんて」

彼は目をむいて、よろけるようにテーブルにへたり込んだ。ビールはまだ残っており、茶色い瓶に細かな汗が浮いている。金色の液体と、白い泡の層を見つめた。

「これが現実、ってか」野間は溜息をつき、冷蔵庫のつまみをあさった。「親に向かって、生活無能力者だと。一体どの口で言ってるんだ」

ベランダの狭い犬小屋では、ヨークシャーテリアの雑種のパロが、主人の孤独に寄り添うように、哀愁を帯びた声で遠吠えしていた。

車窓に飛び去る建物風景。黄緑色の空虚な光線。人影とゆれる吊革。

いつものように瞑目し、電車の振動と同調させていくと、頭が中心が透明に澄み渡ってゆく。一切の雑念を排し、無になるのだ。太陽光線が車内に射し込むと、目を閉じていても瞼が薄桃色になるのを感じる。越川老人によれば、単調きわまりないこの環行内観エクササイズを反復することで、意識が深層部で練られて波動が変化していくという。意識は少しずつ肉体とのズレを生じ、幽閉された個別的な人格の繭から分離され、ついには解放されるはずであった。

ふと気がつく、斜め向かいにサングラスをかけた女が座っていた。どきりとした。

あれ以来、黒メガネをかけた女を見ると、娘の尾行を疑ってしまうのである。女はグラスをずらすと、何やら意味ありげに野間に含み笑いをしてみせた。三十代後半ぐらいの髪長いアイシヤドウの濃い女だった。

「……野間育郎様、ですよ」

「そうですが」

「ここ、よろしいかしら」女は髪に手をやると、隣に腰をかけた。「環行会の者です。そういえばお分かりね。会長先生からお聞きになっているかも知れませんが、わたし新人養育係を任かされています。いまは樹海チームの担当をしておりますの」

自分を知っていて当然という口調であった。樹海チームといった。

「それはそれは。あの、樹海チームというのは、富士山の樹海ですか」

「もちろん。あそこの幽冥界で迷われている方々をお慰めするという、死者達のケアを旨とするボランティアです。当会には山手線チームと富士樹海チームがありまして、私は最近、富士の強化を任されています」

「ご苦労様です。いや、なんといつていいのか」

目の表情がきつく、やや毒々しいが、小柄な美人であった。髪が異様に長くほとんど腰までもあり、麝香アゲハの光沢を帯びている。最近こんなヘアスタイルはあまり目にしない。

「お気を悪くならさないで。世間一般の方は富士山の樹海と口にするだけで、目をそわそわと泳がせて、顔を背けてしまう方が大部分ですもの。不謹慎、忌まわしい、暗い、冒涇だ。でもね、現実に、あそこで不幸な最後を遂げられる方が大勢いらっしゃるのです。同じ日本人として、これをタブーのままにして放っておいて、よいものでしょうか」

「気持ちはわかります。でも、会って早々、いきなりそんな話をされても」

他の客にこんな話が聞かれないか不安だった。

「ごめんあそばせ」手を口元にあて、くすぐったそうに笑った。「私ね、こう見えても世間知らずですの。社会に出て働いたことが一度もないのよ。こんなふうな派手なお化粧しているのも、実は人様が怖いからですわ。こけおどし。仮面みたいなものね。資産問題でいろいろありまして。親族に謀られて、ずっと千葉の施設に閉じこめられておりましたの。日本語も何だか変でしょ。よくいわれますの。私には、青春というものがなかったのです」

「そうなのですか」野間は声を落とした。



「でも、いまが青春かしら、私。会長先生が新しい道を教えてくれたのですわ。そうそう、ご挨拶が遅れました。座間圭子と申します」

女はにっこりと笑って名刺を差し出した。「私、山手線環行会が、唯一の世の中との接点ですの。人様の役に立つことが自分を救うことだって、はじめて知りましたの。でもね、こんなふうに、日常会話の中に死の話題を持ち込むなんて、座を白けさせることぐらい、ちゃんと存じておりますのよ」

確かに職場で揉まれた経験が皆無のような、妙な話し方だ。

「それで、野間様は、山手線チームと、富士樹海チームのどちらを選択されますの」

「なんですか、それは」

「あら、聞いてませんこと。会員は、二つの悪しき波動エリアのどちらかを、選ぶ権利がございますの。人様の魂を救うのに、都会が向いているのか、山が向いているのか。きっと会長先生は、山手線チームに加えたいのだけわ。でもね私、野間様には、ぜひ、私たちの樹海チームにも参加して欲しいの」

「私はまだ、正式にメンバーに加わったわけでもないですし」

「あら、会長先生のお墨付きよ。素質があるって。往々にして、環行の資質の持ち主は、実社会では不運で不器用な方が多いのよ。私みたいに」にっこりと笑った。「それはともかく実は、来週末に、樹海での魂救援作業の予定があるの。よかったら、見学されませんか？」

「いや……」とってから好奇心が疼いた。「ちなみに、何をやるのですか」

「森の中に入って、不幸な縊死者を探し出すのです。あの森でしばらく生活されていた方もいらっしゃるやっあって、遺品なども見つかります。その整理とかね。残念なことに、遺体は野犬に食い荒らされて散乱してますわ。でも、時には、昨夜いらしたばかりのういういしい新鮮なご遺体との対面も。地元警察に連絡して、蠟燭やお線香で簡単にご供養した後、あとは専門家に任せます。お弁当もついてますし、新宿からマイクロバスで出発、夕方には帰れます」

電車がゆっくりと停車した。どっと客が降りる。

「やめときます」

「怖いのでしょうか」

「怖いですよ、勿論」

「それがね、貴方」彼の肩に、手を添えた。「不思議なもので、この経験をすると、亡くなられた方に対して、慈悲深く優しくなれるのです。ご遺体を発見し、両手を合わせているうちに、恐怖や嫌悪、忌まわしさの感情が、純粹で透明な悲しみに変化するのです。次に生まれた時はどうかお幸せに、命を全うできますように、素直にそんな気持ちになれるのです」

「でも、そう簡単には」

「最初はわたしも、震えがくるほど怖ろしかった。ところがいまは、単に悲しいだけ。ときには愛情、いとおしさすら感じます。会長先生もいっておられます。……縊死死体、それはもう一人の自分。怖れているものを正視し、正しく向き合うことにより、心のギアが変わる。十年前の私は、親類たちの策謀で千葉の施設に閉じこめられて、わけのわからない薬漬けにされて、人生を呪っていただけの女なのですが、いまではこうして、人様を教え導くまでになったのですわ」

野間は新宿で降りた。その前に渋谷で降りてもよかったのであるが、今夜八王子にある会長の家で夜通し開催されるという、深夜蠟燭祈禱集会にしつこく誘われたのだ。座間圭子は、彼の携帯番号を聞き出し、明後日にでも連絡するといった。

野間育郎は、この頃からしばしば家に帰らなくなっていた。家庭は居心地が悪かったのである。銀行のキャッシュカードを一枚だけ持って出た。帰宅してもはなはだ不機嫌であった。カプセルホテルに泊まったり、明け方まで開いている低料金のスナックや飲み屋で時間を潰した。いままでは世間体の手前、まがりなりにも維持していた生活の型が崩れ始めると、あとはもう歯止めが効かなかった。自分の内部に、芯や基盤のようなものを見い出したかった。ずるずると蟻地獄を滑り落ちる恐怖だけがつつた。この蟻地獄の底で鋭い顎をひらいて待っている醜いウスバカゲロウの幼虫は、彼自身のものであった。彼はこの地上で何ひとつ役割を持たない者として曖昧に都内をうろつき、不安になると思い出したように山手線生活者となった。新宿公園や代々木公園のホームレスとも仲良くなり、テントに誘われて安酒で杯を交わし「いつでもいらっしやい。あんたは、いい人だ」と言われた。

それでもサラリーマンの御守りのように、いまだ黒鞆をかかえていた。鞆にしがみつくように猫背で歩く姿が、ショウウィンドウに映る。「生活無能者」という娘の言葉が頭の端でリフレインされる。しかし座間圭子のいうには、それゆえにこそ「環行」の資質があるらしいのだ。だとするならば、人としては何だか呪われた資質のような気もしてくる……。

不思議なことに、生活が不安定となり、すさめばすさむほど、山手線生活は充実してきた。環状の鉄道の回転を重ねていくと、次第に現実の物質的な鉄道ではなく、透明で抽象的な円環を回っているのだと思えてくる。回転研磨盤のような円形フィールド。「外回り千回、内回り千回」の合言葉を頼りに、回転反復すればするほど、脳髓の中心が冷たい氷のようにきりきりと澄んでくる。車窓に見えてくる白っぼけた駅、高田馬場、上野、品川、有楽町、御徒町などといった個々の駅などは、もはやどうでもよくなってしまふ。現実の山手線を下界に置いたままにして、彼の意識は、別の時間軸の中を高速回転していた。水面を滑るミズスマシのような加速の快感がぞわぞわと背筋に広がってゆく。現実ではどうてもい味わえない幾何学的快樂のひとつ。薄いナイフの先端のような閃き。モーツァルトの疾走する旋律が鳴り響き、サイクロトロン的高速の滑走が脳の一点で発光した。ぶんぶん唸る遠心力により、肉と魂の波長はほんの僅かな差異と斥力を生じ、魂はもはや堪えきれずに分離し、ゆらゆらと浮上して、いつのまにやら山手線上空に、はっきりと浮かんでいるのであった。

山手線上空、人と時間の彼方六千フィートの永劫回帰一。

白い綿のような雲、まばゆく注がれる太陽光を浴びて、まるでスカイダイバーのような格好で雲間に漂う自分の姿を、野間は突如として発見する。全身に風を浴び、まぶしい光を受けて、まことに爽快である。風圧を受けて高度を増すごとに、毛細血管の血液がサイダーのように泡立ち、さらに活力を増進していくかのようだ。なるほどこれが自由というものか。あまりにも晴れやかで爽快なので、ほんとうはヒトの意識というものは、個我の繭を食い破り、別の時間軸、空間軸を自ら設定し、その多種多様な宇宙において、自在に遊べる潜在力を持っているのではないか

との錯覚すら、覚えてしまう。

遙か下界の方には、皇居の森や代々木公園が、濃緑のブロッコリーのように広がり、汐留や六本木のビル群が、白い石膏模型のように霞んでいる。まるで良く作り込まれたジオラマだった。ときおり同じ高度で、同類らしき意識体が複数、同じ格好で漂っているように思われた。真昼の蛍のようだ。彼らは新参加者に好意を持っているようで、何かしきりにこちらと通信したがつている。昼日なか、山手線上空にこんな同好の士が漂っていて、秘かに自由を満喫しているとは思ってもよらなかった。しかし余裕のない初心者の彼は、いまだ挨拶を送るまでには至っていない。

「外回り千回、内回り千回」一。

とはいうものの、無心に座ることは難しい。雑念がどうしても入ってしまう。ある日の午後、越川老人の指示の通り「環行」を行っていると、ふと、二ヶ月前の嫌な記憶がまざまざと甦ってきた。まるで現実であるかの如く、鮮明だった。

……彼が二階に行くと、娘の部屋が開いていた。由香は最近何を考えているのかわからない。近頃の高校生は想像を超えている。娘は登校拒否気味だが、まさかニュースに載るような危ないことだけはしてしまい。とはいえ父親として最低限のことは知っておかねば……。こっそりと部屋に入った。本棚に難しげな知らない書物が並んでいる。腕を組み、しばらく眺めた。カラフルな雑誌の間に挟んであったノートが気に入り、手にとってみた。日記らしい。ほんの一ページだけ、覗くことにした。

すると、次の言葉に出会った。

「中学の頃、父に似ているといわれ、ゾツとした。死ぬしかないと思った。口元の表情、ふとした仕草、やはり血がつながっているのね、そういったのは親友のクミの奴で、その頃よく家に来て遊んだので父を直接知っているのだ。それ以来、あいつとは口を利かなくなった。そのまま卒業し、別々の高校に行った。絶対に一生許さない」

鼓動が速くなってきた。ページをめくる指を、もう止められなかった。

「私の両親のつもりでいるあの連中。そもそも私は、あの二人に産んでくれなどと頼んだ覚えはない。人に断りもなく勝手にセックスしやがって。この世に産み落としやがって。この後始末どうしてくれるんだ！ こうして、『父』と書くだけでも怒りが込み上げる。一滅びよ私が生まれた日（ヨブ記）一。あのカワウソ男は、私の人生に対する夢や、理想、美意識というものをすべて裏切る存在だ。あの背中！ 茶の間に座っていられると絶望を感じる。善人にも悪人にもなれないただの小心者の社畜。私は時々、全身の血液をすべて入れ替えてしまいたい衝動に襲われる」

頭の中が白くなった。これが四歳の頃、可愛いらしい顔で、ふり返りふり返り自分を見ながら、三輪車をこいでいた由香なのか。自分がなめ飽きた飴玉を父親の口に押し込み、悪戯っぽくクスクス笑った天使なのか。しかしあの赤縁メガネをかけてからは、小さな目を神経質げに走らせ、こんな恐るべきことを考えていたのだ。

環行内観の効果のせいか、それは悪意のように鮮やかな記憶だった。現実に戻ると、すでに列車は鶯谷を過ぎていた。車輪が憂鬱を引きずるような大きな歯ぎしりをたてた。

野間はそこまで思い出すと、猛然と怒りが込み上げ、「ううっ！」といて、座席から立ち上がった。そして痙攣的に体をふるわせ、北朝鮮の兵隊のように両手と両脚をつっぱらせ、車内を数十歩、機械的に歩き始めた。

「よくもそこまで父親を。よくも、よくもー」

頭の一部が、青白く発火した。野間育郎は、お、お一つと叫びながら、車輻から車輻へと走り出した。大して混んではいなかった。列車の最前列の運転席を蹴破って、サーカスの人間大砲のように飛び出したかった。走り出すと、もはや何も見えなくなった。何人もの乗客にぶつかった。気がつくとも最前列車輻の角で崩れ、荒い呼吸をしていた。「どうしたんですか。だいじょうぶですかお客さん」「騒がないでください」気がつくとも、二人の若い車掌に押さえつけられていた。

「ひさしぶりですな。環行は進んでいますかな」

ある日の午後、座席で目を閉じていると懐かしくも穏やかな声が聞こえた。

目の前に越川老人の白髪姿があった。

「やることもないので、毎日、山手線に乗ってはいますが」

自嘲的にいってから「……そうですね。少し心が落ち着いてきたかな」

「そうですね、そうですね。いまに、変化します。廻れば、廻るほど」

乗車中の奇妙な内的体験を伝えようかと思った。しかしただの妄想かも知れない。とはいうもののこんな世界に誘ったのはこの老人なのだ、などと悩んでいるうちタイミングを逸してしまった。あの繻帯少女の一子が、野間の方を上目遣いで睨んだまま、老人に耳打ちした。老人はおもむろに首を振って、孫の頭を撫でた。彼について良からぬことを囁いたらしい。「告げ口娘め」心に余裕がないせいか、疑心暗鬼がつってしまう。

車輻の中を歩いてゆく乗客が、ときどき老人を見つけてそれとなく挨拶を交わしていた。環行会のメンバーなのか。老婦人が腰を折り曲げて丁寧にお辞儀をしたり、若い二人連れの男女が握手を求めたりしてくる。電車の中で何周も何周も瞑目したまま忍耐強く座る姿も見受けられる。いちいち確認はしてないので、誰が会員なのか単なる居眠り客なのか、皆目わからない。あそこにもここにも。意外に潜在的な会員数は多いようだ。

「山手線の荒れた波動を調整しているのです。いわばわれわれは、海の穢れを調整する牡蠣のようなものですな」

会員は牡蠣だといった。老人はエコロジカルな思いつきに機嫌を良くして笑う。

少し離れた席では、似たような紺のポロシャツを着た四人組が、目を閉じて口を真一文字に結んで座っている。大きく電車が揺れても禅僧のように微動だにしない。背筋がぴんと張っている。ので他の乗客とは違和感がある。彼らも環行会の一味だろうか。

隣の車両では、背の高い女性が二人、吊革につかまって立ったまま瞑目していた。紺色のきちんとしたスーツを着て、まるで左右対称の双子のOLのようだ。彼らが全員意識を合わせて、山手線上空の円環状の空間を変えようと目論んでいるのだ。想念のリングを形成するために。ただの変った愛好会だと思っていればこれはなかなか侮れない。野間は薄気味悪い感銘を覚えた。

五反田を過ぎた頃、息子と娘を連れた家族連れが老人を見つけて挨拶に来た。

一家の主は三流コメディアン of 軽妙な雰囲気があった。この中年男は、一子に向かっておべっかを使うように腰を屈め、手を小さく振り、愛想笑いをしてみせた。まるでプリンセス扱いだ。ワンマン会長の孫に対する卑屈な平社員のようにも見える。

野間を見かけてもにっこりと微笑みかけてきた。すでに顔が知れているらしい。きよんとしていると「私たちは、もう家族同然ですからね」と、おべっか使いは念を押した。「私、伝田栄作と申します」差し出された大きな黄色い手は、平べったく湿って吸盤のように吸いつき、気持ちのいい握手ではなかった。別れる時、越川会長は伝田の家族に大きく頷き、好々爺然としていつまでも微笑んでいた。

「まアるい緑の山手線。真ん中通るは中央線ー」

とつぜん、一子が歌いだした。昔聞いたようなCMソング。歌を聴いたのはこれが初めてだ。子供らしいといえば子供らしいが、その演技には作り物のようなどころがあった。ひよっとしてこの子は子供らしさを演じているのではないか。

少女は野間を訝しそうに睨みつけた。不意にくるりと体を捻り、蜜柑色のリュックサックから彩色鮮やかな絵本を取り出した。そして片目を押しつけるようにして読み上げた。

「……地獄の世界は、漏斗状の大穴として、地球の中心に達しています」少女は大きなはっきりとした声を張り上げた。「てっぺんの第一圏から、いちばん下の第九圏まで、九つの圏から構成されています」

子供は顔を上げた。不意に片手で拳を握り、リズムカルに節をとるようにして、「まアるい緑の山手線。真ん中通るは中央線！」と、再び歌い上げた。

彼女が開いている表紙には、どこかで見たような絵がデザインされていた。白い裸体の男女が、胞衣のような半透明の膜に包まれ、輝かしい彩雲の中を上昇している。それを天使や悪魔のようなものが見下ろしている。後で分かったことだがそのエキゾチックな彩色絵画は、英国の詩人画家ウィリアム・ブレイクによる『神曲』の挿絵であった。子供用の絵本などではない。しかもカラーコピーを不器用に重ねた著作権違反の手作り品だ。

「かつては、最も美しく、光輝に満ちた天使であったルシフェルは」

甲高い声がまた朗読を続ける。「自分の知性と美しさに慢心し、神に叛逆してしまいました。真っ逆さまに墮とされたのが、悪臭でいっぱい of 地獄の穴の底でした。地獄は細かく分けられ、『どんよく』『ぼうりよく』『じゃいん』『ぎまん』などの罪に応じて、亡者たちが、悪夢の空間を作り上げています」

彩色本の朗読に飽きると、また子供らしいはしゃぎぶりに戻って、

「まアるい緑の山手線。真ん中通るは中央線ー」

娘は手拍子を取り、両足をぶらぶらさせた。呆気にとられていると、老人が呟いた。

「この子はね、学校に通わせず、私が特別な教育を施しているのですよ。何といっても宝物ですから」老人はステッキを握り直した。目を細めて満足げに孫の姿を眺めている。

「ほんとうに大切な教育とは、ヒトがどこから来て、どこへ行くかを教えることだ。……一子はもともと、天使のように愛らしい子なのですが、人々の悪念を受けてひどいアトピーになってい

るのです。藪医者のステロイド療法でさらに悪化してしまった。世の人々の悪しき想念を受けて、学校でも養護施設でもいじめられる。いわばパッション、受難ですな。一般人の子供は愚かで残酷です。一子の非凡さや尊さは、とうてい分かりやせんのです」

「なるほど。それであの繃帯をねえ。聞くのは失礼かと思ひまして」

「私も、よく言うのですよ。これはお前さんたちの悪念なんだぞと。会員の者も分かっている。だから、連中も一子を大事にせざるをえない。加えて私の教育観もありまして、現在は休学状態なのです。まあ、結果的には、幸か不幸か、型で押したような偽物の知恵を感染させる学校教育の害毒から、いったん距離を置かせているわけですな」

「それはそれは」と野間はいった。「いまは、フリースクールなど、いろいろ自由な考え方がありますからね」

野間は内心では訝りながらも気弱な返答をした。一体、どういう家族なのだろう。野間家も壊れているが、越川家も相当に……。近くにいた他の一般乗客は、文庫本を読んだり携帯をいじるふりをして、冷ややかに三人を無視していた。

彼はいつのまにかうとうとしていた。まるで越川老人に催眠術でもかけられているようだ。電車の物憂い振動が快い。老人が何か喋っているのに気がついた。顔を上げると、目の前に三人の女性と一人の若者が立っていた。

太陽は傾き、彼らの顔をオレンジ色に染めた。何かあらたまった話をしている。若者はどう見ても大学生、ことによると高校生ぐらいにしか見えず、華奢な体格で色白の綺麗な顔立をしていた。

女達は、おずおずとした少年を、末っ子の弟のように大切に扱っている。

「それにしても、よく決心されましたな。尊い志です」

越川老人はいった。

「私たちも、導いてきた甲斐がありました。それだけに、いま大変な責任を感じておりますの。ダイバーとしての使命は、かけがえのないことですし、普通に幸せを求める人間が、おいそれと出来ることではありませんもの」

そこにいたのは、先日出会った座間圭子という女だった。彼女の腰のあたりまでもある黒髪は麝香アゲハのような光沢を帯びていた。「そうよ。当日まで朝井さんのお世話は、私たちがしますからね。何でも行ってね本当に。潜水夫さん」

二人の女が励ますように、朝井少年の手を握った。この少年にはどこか初々しい仔鹿のような雰囲気がある。女の一人は黒いアーモンドのような目をしていて身のこなしに狡猾な狐のような優美さがあつた。もう一人は褐色の髪をカールさせ華やいだ服装だった。二人とも美人だ。派手な二人の間で、純朴な地方青年のように見える彼は、照れたように頬を染めて黙って頷いた。その瞬間、電車が大きく揺れて、四人の腕が吊革に交差し、お互いを支え合つたので、思わず健康な笑いがこぼれた。

「朝井君。優一君だったね。これはね、昔の私のニュースレターをまとめた著作です。潜水夫としての心構えを書き連ねたものです。偉大なる先達は、一人の例外もなく、皆この道を通って行ったのです。恐怖と不安を乗り越えて、打ち勝たなければなりません。肉体はうつしみ、幻影です。痛みも幻影です。私のメッセージを何度も読んで、読んで、読んで、読み抜いて、血肉に染みこませてください。もしそれを怠れば、渦の底へ、奈落へ、無明の闇へと巻きこまれます」

「はい、会長先生」

澄んだ声で彼は応えた。「僕、やります」二人の若い女が感きわまって、朝井少年に左右からキスを浴びせた。髪の高い年上の女は、彼のひとさし指を、自分の指間に挟んでしきりに愛撫し、いかにもいじらしいという表情で微笑んでいた。

ほっそりした仔鹿めいた少年は、年上の女達にされるがままになっていた。

野間は薄目を開けた。しかし彼ら会員だけに伝わる特殊な隠語が飛び交うだけで、何が話されているのかわからない。

遅い午後の西日が建物を黄色く染めていた。ローレライの人魚たちに寄り添われて、冷たい水底へと誘われる若い水夫を連想した。朝井少年は一子に深々と礼をした。頭部に白い塊をつけた

片目のミイラ娘が、当然のこのように手を伸ばして髪を撫でた。

「ありがとうございます」

少年は、ゆっくりと頭を下げた。野間の知らない内部の序列があるらしい。朝井少年は、三人の女たちに付き添われ、奥の車輻へと消えていった。

一山手線外回り。

列車は大塚近辺を廻っていた。日が斜めに傾き、物憂い車窓風景が連なっている。赤錆びた線路。斜めに生えた雑草。投影される青い影。

「……お目覚めですか」越川老人は穏やかにいった。

「さっきのダイバーとか潜水夫とか、あれは一体何なののでしょうか」

しばらく、沈黙があった。

「一つ言えることは、私達の会では、男性の潜水夫は、とても女性に慕われるのですよ」答えになっていない。

「そういうものですか」

「大きな使命を果たすので、わずかな期間、特別なフェロモンを放つのでしょうか」老人は静かに笑った。「今夜、彼は、忘れられない一夜を過ごすでしょうな。ははは。……それにしてもあのひたむきさ。若いとは素晴らしいことだ」

忘れられない一夜。若いとは素晴らしい。どういう意味だろう。あの若者の切れ長の目の光は、あるところで一線を超えてしまう右翼少年のまなざしを思わせる。不吉な予感を感じながらも、野間はぼんやりと床に映る乗客の蒼い影を眺めていた。

山手線環行内観法。内回りと外回り。廻れば廻るほど、心が研ぎ澄まされ、意識に変化が起こりつつあるような気がしていた。理屈では見えてこない世界、経験してみなければわからない物ごと。一月前と同じ乗客なのに、彼らは半透明の物影となり、世界が自分と振動音だけに統一されてゆく。荒い鉄車輪の振動から、内奥の微細な震動へ。「ゆれ」だけが唯一の实在であるかのような知覚の瞬間。目を閉じると二本のレールが一本となり、その白金色の線に意識の先端を焦点化させる。その瞬間、「向こう側」へと突き抜ける。山手線の銀色に輝く車両の箱は世を忍ぶ仮の幻であり、本当は心的な何かが発育するための揺り籠なのだ。東京の中心の明るい虚無のメリーゴーランド。しかしその能力とは実務能力や生活力との引き替えに、代償として与えられるものらしい。「内回りを極め、外回りを極める。内回り千回、外回り千回」越川老人の柔和な口調が、野間育郎の頭の中に繰り返された。

翌週、野間育郎は昼食をとった後、池袋駅の最前列で電車を待っていた。全身にえらく疲労を感じていた。

向かい側プラットホームの縁の下の暗がり、何か薄い影のようなものが動いているのに気がついた。最初は線路工事の作業かと思った。しかし影は次第に湧き出すように増えてきて、ぞろぞろと歩き始めた。彼から見て向かって右横方向に進んでゆく。動く影たちの顔立ちははっきり



とせず、どれも小児のように小型だった。グリム童話に出てくるいびつな地霊を思わせる。地下通路を這い進む小びとの坑夫たち。男女や年齢は何となく察せられた。彼らは、色彩鮮明なプラットフォーム上で待つ人間達とは違い、曇った色合いで精気を欠いていた。ちょうどカラー写真とモノクロ写真が、上下二重写しになった印象だ。

やがて霊たちは、意志の統一ができたのか、しゃがんだままの姿勢で両手を前の者の背中に付け、盲人の群れのように、モコモコと右に進んだ。野間は水を浴びたような気がした。「あ、あれ…」と小さく言って、隣の小学校教師ふうの老女の肩をつついた。「あそこ、見てください」びっくりと感電したように肩をそびやかした女は、気味悪そうにメガネの奥から彼を睨みつけた。痴漢に触られたような険しい顔だ。

老女は何度も睨み返ししながら列を離れ、そそくさと立ち去った。

今日もまだ職は見つからない。書類で落とされ、ときおりの面接で落とされる。新宿の職業安定所にもろくな仕事はない。空虚さと倦怠感、皮膚の上に曖昧な厚みを持つようになった。倦怠と不安でぬり固められた繭の外に出られない。血を吐くような懶さに堪えかね、野間は東京の至る所の裏道を歩き回った。多摩川の土手、千駄木界限、大手町のオフィス街、皇居東御苑、お台場の展望台、月島の狭い路地、品川の古い商店街……。

その度に、空を見上げた。

無機質のビル窓が座標のように連なる。ロープの下で清掃夫が青紫色のガラスを拭いている。虫のようなヘリコプターが憂鬱な雲の下を、ばたばたと低い音を響かせて這い回っている。いつのまにか、野間育郎は写真でしか見たことのないあの異様な雲の片鱗を探していた。すべてを浄化するという恐るべき怪物雲。人々の鬱感情を吸い寄せ、陰の気、鬱の気を吸い寄せて、膨大な闇を熟しきり、ついにはその内在力で下界を浄化しつくす黙示録的雲。しかし現実には蒸し蒸しとした不安な曇り空だけが續いていた。何の変哲もない日本の空の曖昧な大気がどこまでもひろがっているだけであった。

木曜日の夜、憂鬱症と物憂さに堪えかねて、新宿歌舞伎町で酒を飲んだ。以前は帰途が同じだった同僚とこの界限に来ていたが、ずいぶんとこういう憂さ晴らしをしていない。飲み始めると限度がなくなり、三軒目を出てから、街灯の青白い光が侘びしく照らす花園神社の石段に腰を掛けて休んだ。しばらくそうしていると、痩せた茶髪男に、猫なで声で肩を叩かれた。「ぜったいいいから、お客さん、僕信じてヨ。だいじょぶてすよ」アクセントからすると、韓国系のような。何とかいう韓流役者に似ていた。泥酔同然の彼が連れて行かれた地下階段の店は、けばけばしい風俗店であった。入口でお札を抜き取られ、乳房の大きな女の子に手を取られ、赤紫のランプの点いた妖しげな個室に入った。

女はラテン系外国人で、鳶色の髪は縮れ、ぴっちりした短いパンツを履いていた。目を見て、にっと笑い、ズボンをずるずると脱がされた。シャワー室へ入ってから「どこの子」というと、彼の体を洗いながらハスキーな声で「ブラジルね。名前リサ。また次、指名して」といった。シャワーを背中に浴びせながら「幾ら持ってる？」と尋ねてくる。店とは別の私的交渉らしい。

「持っていない」というと、「嘘」といって笑い、右手を下に伸ばし、ぎっと性器をつかんだ。「するか？ 本番」「いや」「……まけとくヨ。プラス一万円」むっちりとした艶を帯びた、褐色のゴム鞠のような体を押しつけた。「家族の、仕送りね。弟の学校」情に訴えるつもりらしい。黙っていると何かポルトガル語で悪口らしき言葉を吐いた。「じゃ、五千円」急に相場が変わった。あまりにも哀しそうにいうので、「オーケー」と応えた。ベッドに座るやいなや、リサは彼の下半身に手早くコンドームを被せ、にっこりとして押し倒すと、むっちりとした果実のような乳房を彼の鼻に押しつけた。野間は、自分たちの行為を映している壁の冷たい鏡を見ているうち、次第に酔いが醒めてきた。ざらざらした湿った縮れ毛をまさぐっているうち、熱っぽくも切ない欲望を覚えた。「イパネマの娘……」「なあに？」「なんでもない」体が熱くなってきた。野間は

束の間、家のこと現実のことを頭の隅に避けておいた。下になった女は、うっすらと唇を開き、半眼を細く光らせた。「コパカバーナ」「何、いってる」「ラテン、アメリカで、知ってる、言葉を……いった、だけさ」褐色の女は笑って鋭く爪を立てると、猫めいた声を出しつつ、腰を何度も大きく湾曲させた。カーニバルのダンスのようだと、彼は思った。やがて鋭い一瞬が終わり、彼は溺死者のようにぐったりと弛緩した。

ふと気がつく、リサは何事もなかったかのように、ベッドに背をむけ、彼の財布の中身を前屈みで数えている。蜜色の光沢を帯びた愛らしい肩胛骨が動いている。「おい、やめろ」「嘘つき。お金ない言った。あるじゃないか、これ！」女は指で挟んで二枚ほど抜き取り、腰に手を当て、問いつめるように立ち上がった。「嘘つき、嫌いね」

紫色の狭い個室で押し問答が始まり、野間が大声で抗議すると、カーテンが開き、奥からのっそりと巨大な黒人男が出現した。眉を大袈裟にひそめ、なだめるように太い両腕を差し出し、「静かにベイビィ。静かに一。あなた良いヒト、私たちトモダチ。何も、問題ない」二メートル近くありそうな黒光りする鉄人だ。「何も、何も、問題ない」大きく目をむきながら、用心棒にしては美声すぎるジャズボーカル風の低音を響かせた。全裸のままのリサは、黒人の巨大な影に隠れて顎をしゃくり、財布をポイとこちらに投げて寄こした。

恐怖を感じた野間は、服と荷物を一式抱え、慌てて着替えて、ほうほうのていでこの国際色豊かな風俗店を出た。幸いにもカードだけは抜き取られていない。

彼は悄然として、再び憂鬱と物憂さがよどむいつもの灰色の底なし沼へと戻っていった。

その頃、全国各地で奇妙なことが起きていた。

スズメバチの群れが同時多発的に人を襲撃したのである。岡山の小学校では下校中の子供が群れに襲われ、四人が重体、一人が翌朝死亡した。福島では、庭仕事をしていた八十歳の老人が、十数カ所を刺されて無惨にも亡くなった。目撃者の近所の主婦は、まるで怨恨殺人のようだったと興奮気味に語った。昆虫による怨恨殺人一。その後、数日のうちに、日本全国で一斉にスズメバチが革命蜂起したのではないかと思われるほど、蜂による事故が多発した。昼過ぎのバラエティ番組では、異常気象で蜂たちは気が立っているらしい、とナチュラリストを名乗る童顔のベレー帽男が、深刻そうに解説した。彼はしばらく売れっ子になった。

妻と激しい口論をした。彼女はすでに家事を放棄していた。毎日、テレビとパソコンを睨み、通販ばかりやっている。引き籠もりから多少元気になると、もうこれだった。おかげでキッチンや廊下には、開けもしない段ボール箱や、中をちょっと覗いただけの箱が、山のように積んであった。ダイエット器具、自然派化粧品、組み立て式自転車。まるで陰にこもった復讐のように、それらの箱が天井まで山積みになってゆく。

野間がプランターの野菜に水をやっていたら、枕とタオルを抱えて、奥の部屋からよろよろと立ち上がってきた。それにしても、ずいぶんとまあ太ったものだ。

「そんな余裕があったら、仕事を探しにいったらどうだい」

「だから、俺は毎日」

「もう、生活費がないのよ。これから家のローンどうするつもりよ」

「そっちこそ、買い物を、控えろよ。無意味なガラクタばかり買い漁りやがって」  
いちばん嫌がることを、言ってしまった。

「関係ないじゃない！ 部長の紹介で貴方と知り合ってから、いままで一度も幸せだったことはなかったわ。埼玉営業所の商品管理課に、いい若者がいるからって。満子さんにお似合いだって。喫茶店に現れたのは、パツとしない老け顔のおどおどした貧相な男。馬鹿よね私。パパの大親友の顔を潰してはいけないとばかり。でもまさか、こんな惨めな思いをするなんて」

「しょうがないだろ、肝臓癌じゃ。あんなに早く、島村部長が逝かれるとは思わなかった」

「そうよ。貴方には実力がないから、後ろ盾がなくなった途端、この始末よ。会社も吸収されちゃうし。私、あの頃付き合っていた田所さんと結婚すればよかった。どうしているかしら、田所俊也。何とかいう俳優に似ていてハンサムで、素敵だったわ。背がすらりと高くて仕事も出来たし。外車にもとても詳しくあったのは、車のディーラーだったからよ……。それに彼、営業マンだけに気の利いた言葉がいえたわ。ああ、どうして私がこんな、野暮なかわうそ男と」

昔は、小学生時代にかわうそという渾名で呼ばれたことを教えると、「子供って、残酷なセンスがあるわね」と、好意的な笑いを浮かべ、にこっと笑ってくれたものだ。

「わたしは子供の頃から、ずっと素敵なことを求めていたのよ、とってもステキな、ステキなこと……」妻は再び枕を抱え、歌うように歩き出した。「まさかここまで、惨めな人生を歩まされるとは思ってもみなかった。それもこれも、つまらない男と一緒にってしまったせい。とんだ貧乏クジ。私は幸せな同級生が、羨ましくてしょうがなかった。このまま年とって、ぶくぶく太って、頭のとっぺんも薄くなって、ますます醜く、滑稽になるのだから。毎日鏡を見るたび血の気が引いてゆく。もう誰も声をかけてくれやしない。私は部屋の奥で、陰気に腐ってしまった古い果物よ。ああ、嫌だ嫌だ」

娘の由香は学校へ行って家にはいない。ヘリコプターがのろのろと鉛色の雲の下を低空飛行していた。心の中で、何かが切れた。野間はいつまでも無言のまま、如雨露から水滴をしたたらせていた。

野間育郎は、家を出ることにした。娘にだけ、手紙を書いた。

「強く生きるように。自殺しないように。人を軽蔑しないで、良い点だけを見るように。お前の子供の頃は可愛かった。宝ものでした。お父さんとお母さんの人生は、失敗でした」

この下手な手紙を、家からだいぶ離れた高円寺の駅前ポストから投函した。娘の日記のことはふれずにおいた。

もはや社会にも家庭にも、自分の居場所はないのだ。銀行のカードと、黒鞆、携帯電話、風邪薬と胃腸薬、そしてわずかな着替えだけを抱えて、ついに本格的な山手線生活者となった。歯がみのような車輪の軋り。内回り外回り。この空虚さを何千周りもかみしめて、極めつくさなければ、不定形の鬱塊としてぐにやぐにやに退化してしまう。ホホエミ鬱病一臆病さゆえに微笑んできた鬱病インチキ男。つまるところは、ローンからも社会からも、家族の責任からも逃げただけのことだ。しかしこの自分を徹底して破壊しなければ、底の底、自分の芯の芯には、タッチできない。永遠にうっすらとホホエミの仮面を貼りつけたまま。暗雲のようなこの憂鬱を分解し尽

くしてしまいたい。焼き尽くしてしまいたい。そのためには、虚無僧のように足が棒になるまで、この肉体を歩き潰すのだ。

夜は、カプセルホテルやネットカフェ、場合によっては駅の階段や公園のベンチで寝泊まりした。無精髭が青黴のように伸び、髪は油じみてくしゃくしゃに乱れた。一張羅のスーツはよれよれになり、鏡がわりのショウウィンドウを見ると、人ではなくて惨めったらしいかわうそ男が前屈みで彷徨っている。もはや町のゴミ箱を漁ってうろついている立派なホームレスの風貌だ。それでも御守りのように、黒鞆だけは大切にしていた。そのうち警官にも職務質問を受けるようになった。どうやら犬並の嗅覚を持つ彼らに、全身から発散される胡散臭さを嗅ぎつけられるようになったらしい。

樹海に行く予定の日が来た。朝、新宿のカプセルホテルを出てしばらくの間は時間を潰した。まだ人気のない街に出ると、散乱したゴミ箱を漁っている鴉と出くわす。ちよんちよんちよんと路地の真ん中を跳ね、こちらを伺うように首を傾げ、ガラス玉に似た眼玉を光らせる。近づくと、ぼさぼさぼさっと黒紫の羽を広げ、路上に大きな影を落として飛んでゆく。野間は念入りにシャワーを浴びた。体中が臭かった。駅のロッカーに荷物は置いたままだ。何と立派なホームレスぶりだろう。けれども今日はラフなポロシャツ姿である。森の中を歩くので安っぽい使い捨てレインコートも買ってある。最低限の身綺麗な格好は、維持したいものだ。そんな瑣事を気遣うことで、樹海への不安感を押し殺そうとしていた。

携帯電話で時間を合わせ、青梅街道で伝田の運転する車に拾ってもらい、午後遅く中央高速道を走った。伝田はあの黄色い顔のコメディアンふうの男である。すでに前の座席には濃いアイシヤドウの座間圭子が乗っていた。遠目には美人だが、舞台化粧のように厚塗りのためか、昼間見るとどことなく陰惨でグロテスクに見えた。

フロントガラスの明るみを帯びた曇り空の向こうに、白金色の太陽が覗いた。マイクロバスもなければ、弁当もないらしい。拍子抜けした。嘘なのだ。過去に一回そんなこともあったという程度のことらしい。この集団の規模は小さいのか大きいのかいまもって分からない。

車は順調にゆるやかに、青白く霞む広々とした中央道を進んでいった。薄く靄のかかった風景。左右に開けた見晴らしのよい蒼灰色の空。陽を浴びた丘陵地帯に、小さな白い菓子箱のような住宅や、くたびれたような雑木林がえんえんと点在している。

やがて大月を過ぎ、鈍いコバルト色に耀く芦ノ湖を見下ろして、幾つかの暗く湿っぽいトンネルを過ぎた。濃緑の山並が大きく迫り、しばらくして富士スカイラインに入っていく。

野間は長い沈黙に堪えきれず、

「山手線環行会の目標というか、活動の目的は結局何なのですか」と口を切った。「単なる鉄道クラブではないようすし」

「一死の教育、ということですか」

窓から片肘を出し、目を細めて風を浴びていた座間圭子が、短く答えた。

「教育、ですか」

「そう、会長先生の口癖。よく聞くでしょう。メメント・モリ。いまの世の中、誰も死については教えてくれませんわね。だから、先生は死を凝視し、そこから生きる姿勢を学べと教えていらっしやるの。死だけじゃないわ。暗いもの、陰鬱なもの、怖ろしいもの、孤独なもの、穢れたもの、敗北したもの、奇形のもの、グロテスクなもの。ありとあらゆるマイナスイメージを、凝視しなさいと。そうすると、おぞましき、醜悪さの本質が、ぷるぷるとふるえ始めて、その限界に堪えきれなくなって、正体をあらわすの。まるで化け狸のように。その奥にあるのは、湖水のように澄んだ広がり。想念や意識は未知の力を持っているのよ。死と恐怖を避けてはいけない。死者のためとは生者のため。山手線や富士の樹海の蠟燭セレモニーも、みんなその発想ですわね

」

「我々は、いわば逆説的なポジティブシンキングを、主張しているんですな」

伝田がハンドルを握りながらニツカリと笑い、黄色い顔を向けた。犬歯が光った。

「テレビに出ているスター評論家がというような、流行りの積極思考は、かならず破綻する。こうすれば運が良くなる、ビジネスがうまくいくってね。でも運が良くなるのはその著者だけ。追従者やファンは挫折し、己の無能さを思い知り、恨みがましく元の侘びしい生活に戻る」

「でもそれは、やり方次第じゃないんですか」

「すべて両極がありますのよ、この世界は。闇と光。死や病気やおぞましいものを隠してはいけないの。まずはネガティブなものを凝視する。そうすれば、闇それじたいが熟して行って、自らを霧散させ、自壊させる。会長先生いわく、闇即光、陰即陽という自由の弁証法。ほんとうの心の自由の地平は、その向こうに広がっているのね」

「ペシミズムという酸味のきつい酒が酸敗すると、オプティミズムという芳香を放つ金色の美酒となる」伝田は陽気に笑い出した。「これも会長の口癖」

しばらく野間は沈黙していた。

「死の教育ねえ……。しかし、越川先生というのは何者なのでしょう」

左右を暗い雑木林が囲んだ。木影が写真のような鮮明さでフロントガラスを舐めてゆく。

「別の次元と通じている方……。としかいいようがないわね」

圭子が応えて、違つかしらというように伝田に目配せした。

「そうさな。師匠だね、われわれの」

「世俗的なことをいえば、元国鉄職員よ。長年、労働組合で活動してましたの」

意外なことを聞いた。

「八十年代の後半ですかねえ。国鉄がJRへ移行する、いわゆる国鉄民営化という流れがあったんじゃないですか。あの国労解体のごちゃごちゃの中で、今でいうところの鬱病になったんですな。入院して薬を飲んで治療していた。統合失調症になりかかったという説もある。その後、座禅の真似事をしたり、プロテスタント系の教会に見習い牧師として在職したり、諸国行脚の旅をしたり。暗中模索、試行錯誤の後に作り上げたのが、あの山手線環行内観法というエクササイズ。われわれはそう教えられています」と伝田。

「個人的な経歴って、本人にも聞きにくいでしょう？ あまり外では言って欲しくないんだけど、昔、中央線に飛び込もうとしたの」

「誰が？」

「うちの会長先生よ。初期のニューズレターに出ているのだけれど、まさに一步踏み出そうとした瞬間、目前に《輝く雲》が出現したというの。《不可知の雲》とかいってるわね」

「気体化した天使群とか、未分化の霊とか、色々ね。先生、いろんな言い方でいうから、頭がこんがらかってしまう」

プシュッと音がして、圭子から運転手に缶コーヒーが手渡された。次いで野間にも一缶。

「不可知の雲というのは、中世の神秘家の書物からの借用。会長、ダンテ研究家を自認してるけど、イタリア語の方はどうなのかな。それにもともと『神曲』はトスカナ方言で書かれている

らしいし。かなりの専門家でも歯が立たないはずだ」伝田はにやにやした。

「馬鹿ねえ。学者の文献学的な研究と違って、ダンテが見た世界を直観的に洞察するというアプローチなのだから、それはそれでいいのよ」と語気を強めた座間圭子。

「八王子の奥にある先生の書斎には、マダム・ブラバツキー、ルドルフ・シュタイナー、スウェーデンボルグあたりの神智学の本が並んでいるわ。猪が出るような一軒家だけど、あるお金持ちの会員が寄進した戦前からの山荘で、通称ロッジとっているの。林の中にあって煉瓦の暖炉もあるわ。廃屋同然だったけど、私達が使えるように改装したの。そこでときどき、夜を通して明け方まで蠟燭祈禱集会を開くのよ。野間さん、いらっしやらなかったけど」

座間圭子は、なじるように野間を見た。

「周辺には綺麗な小川や、ちっちゃな養蜂場、果樹園もあるのよ。でも本当に会長先生が関心があるのは、鬱病と自殺の問題。どうしたら現代人が、鬱の繭から脱出できるのか。自己破壊衝動を、超えられるのか。……汝、己を憎むなかれ。これが私たちの中心戒律」

「でもどうして、いまの日本は鬱病が増えているのでしょうか」

「悪意ですわね」と圭子がいった。「自分自身の悪意で、暗い繭をつむいでいるの。私達は世界を呪う悪意の糸で、自分を閉じ込めてるの。魂の自縄自縛。愚かな蚕の幼虫みたいなものよ。……それに、世の殺人犯が、本当に憎いのは自分よ。自己憎悪。すべての殺人は、勘違いだわ」

肌寒い。標高が少し高くなりうっすらと白い霧が出ていた。

いよいよ富士山が近い。国道を進むとますます雑木林が多くなってくる。ところどころ富士の優美な稜線が覗き、西側は午後の光を受けて桃色がかった面をさらしていた。白い雪の冠が、光を浴びていた。遙か前方に濃緑の裾野がなだらかに広がっている。ゆるやかに続く国道を、木立の影が青紫のまだら模様染めていた。車がゆっくりと停まった。

「ああ、いい空気だ。ここは精進湖や本栖湖にも近いところです。森林浴には最適。オゾンがいっぱいだ」伸びをしている伝田の向こうで、群葉がざわざわと風にそよいでいる。

「ええと、興味あるかどうか。富士の風穴、大室の風穴とかは、あっちの方ですな」

「私たちを見失わないようにね。磁石は効かないわ。かなりの場所で」

小荷物をむりやりズボンのポケットに詰め込む野間を見て、座間圭子がいった。

赤松やモミの混成林が、すでに道路脇を覆っている。

「この辺の玄武岩が、落雷の度に磁化されてしまうの。樹海の下に埋まっている岩ね」

「迷ったら困るじゃないですか」不服げに野間はいった。

「携帯も通じない」くるりと伝田が振り向いた。「……といわれていますが、これは噂です。樹海をめぐる都市伝説ってやつ。実際には何とかあります」

「あの辺、白いヒモが見えるでしょう。ピクニックに来た連中が自分で迷わないようにと張ったのだろうけど、ちゃんと回収しないとね。何も無い樹海はとても美しいのに」

「ゴミも拾いましょう。ボランティア活動です」

伝田はにんまりと笑って腰を曲げ、片手でガムの紙屑を拾った。

「冷えるわね。今日は」

圭子が左右を見回しながら、両腕をこすった。白い腕に予防接種の跡がある。



「もともところは、溶岩流にできた樹海だからデコボコしてるの。藪のあちこちに穴があるわ。転んで怪我などしないように。それと各自、懐中電灯とキャンドル、忘れないでくださいね」



野鳥が啼いている。日は傾きかけていた。高原らしい秋の虫の声も聞こえる。

見張り役のように枝にとまっていた一羽のカラスが、ばさり、ばさり、と飛び去ってゆく。

湿った板の張られたゆるやかな遊歩道を進むと、白い表示板が立て掛けられていた。

『命は親からいただいた大切なもの。』

もう一度静かに両親や兄弟、

子供のことを考えてみましょう。

一人で悩まず相談してください』

野間は、泥を飲み込んだような気がした。鳩尾のあたりが重たくなった。

ここはやはり富士の樹海なのだ。

三人は道の脇に逸れた。遊歩道を離れた途端、Sの字やUの字に張り出た木の根が絡まって、どうにも歩きにくい。少し進むのにも時間がかかる。ごつごつとした根に注意を奪われていると、方向感覚を失ってしまう。パニックに陥って上を見た時には、すでに見知らぬ枝々が陰画のように空を覆っている。恐怖感に駆られて闇を避け、明るい方へ明るい方へと進んでいくと、そこには林に囲まれた笹藪が、あの世の光景のようにざわざわとそよいでいる。理性を失い、ますます樹海の奥地へ奥地へと誘われることになる。

厚く柔らかな朽葉の層を踏みしめながら、奥へと進む。

つんとする森の匂いが鼻をついた。腐葉土とキノコと樹脂の匂い。数メートルほども横に長く張った黒い根が、行く手を邪魔する。やっとの思いで跨いで、さらに前進。弾力のある枝に頬をこすられ、早くも引っ掻き傷ができた。いつのまにか天候が怪しくなってきた。霧のせいで皮膚も濡れていた。

疲労が溜まってきた頃であった。先行する伝田が、木の枝で何かを差し示している。

「発見一。ありましたよ、ありました」

「衣類が散らばってるわね。若い子だわ。二十歳前後かしら」

炬燵ほどの大きさの半月形の岩の窪みに、髭のような木の根が垂れていた。

その下に、手帳や薬の瓶、ペットボトル、パンの入っていたビニール袋、雨が乾いてべこべこになった雑誌、汚れたスニーカーなどが泥にまみれてへばりついている。岩に立て掛けられているのは小さな汚れたゲーム機だ。半袖シャツが枝にかけられ干されたままの状態だった。

「ははあん。住んでたな、ここにしばらく」

伝田と座間圭子は、遺体を捜すように周囲の林を見回した。梢で鳥が啼いている。

「ここで亡くなったのでしょうか」

「わからないわ。多分ね。来てないのかしら地元警察。回収されたら普通、遺品も片づけられるんだけど」

「御本尊は、野犬にやられたか。エロ本まである。馬鹿だねえ、最後まで」

「悲しいわね」小さな黒い手帳を拾い上げた。ページをめくると日記らしい。「五月まではここにいたのね。一人で」

森の湿度が陰鬱にさせた。

野間は目を逸らした。ゲジゲジのような長虫が、釣り竿のように伸びた赤い根の表側から裏側へと、S字を描いてゆっくりと這い進んでいた。

ひっそりと風景が沈んでいくようであった。死へと向かう朦朧とした衰弱の中でこの男は何を考えていたのだろう。さっきまで眺めていた晴れやかなスカイラインの眺望が、まるで嘘のようだ。すでに霧が深くなっていた。近くと遠くの樹木の遠近感が際立ってきた。

片付けが終わると岩の窪みの前に一本の蠟燭が灯された。

蠟燭の金色の炎が霧の中のにじんでいる。

ときおり炎が風で吹き消されそうになる。林の中に空気の対流があるのか、霧は木々の間を一定の濃淡を描いたまま横に移動してゆく。

蠟燭の儀式が始まった。炎が霧の中で金色のにじんだ。虹色の輪が淡くゆらめいている。座間圭子が岩屋の前にしゃがみ、何か口の中で唱えている。二人の男は立ったままで頭を垂れ、合掌した。

数分間が過ぎた。霧の水気が頬を濡らした。

「警察に連絡しないでいいんですか」

「いいのよ。かえって私達、やっかいなことになるわ」

黙り込んだまま両脚に力を入れて、太い灌木を跨ぐ。

息がまた荒くなった。汗が滲む。上の方で鳥の声が響いた。厚い緑の絨毯のような苔の層にぞろぞろと山蟻の行列が続いていた。樹の根元に赤茶けた毒々しいキノコがもりもりと群生している。

ふと気がつくと、霧の中で一人だけになっていた。ついさっきまでの記憶の中に、何か綿のような乾いたものが挟まり、思考が停止している気がした。

しばらくの間、圭子と伝田の二人は数メートル先の灌木群の影にいたはずだ。話し声も聞こえていた。いま耳を澄ますとそれは人の声ではなくて木の葉が擦れ合う音に変わっていた。疲労が溜まっていた。足腰が痛む。樹海にたぶらかされているような気がした。

野間は、腐りかけた切株の上に苦い唾を吐いて、ゆっくりと深呼吸をした。

「暗い森、暗い森……人生の道半ばに迷う」

しばらく灌木の中を進むと、遠くに白い霧の奥がにじみ、蠟燭が灯っている。

二人はあそこで蠟燭の儀式を行っているに違いない。何とか絡まった木を掻きわけて行くと、蠟燭と見えたものは岩に溜まった水溜まりのゆらめきであった。

自分の感覚が信じられなくなってきた。

茫然として野間は顎を撫でた。夢遊病者になったような気分だった。

立ちつくしていると、奥に梢のトンネルのよう空間が広がり、水色の明るみが見える。左右も背景も霧で囲まれ、遊歩道からもすでに遠く、どこから入ってきたのかもわからない。疲労と脚の痛みがはなはだしい。

すべて幻ではないだろうか、この森の風景は。何だか、この世で一人だけになった気がした。遠い霧の中に幾つかの炎がゆらめいている。

霧を透かして人影らしきものが見える。数人の影は蠟燭を囲んでいるようだ。上から、左から、後ろから、囁き声が聞こえる。近づくとふっと消える。

乳白色のベールのような霧の中に現れる焰は、幾つもの遠い鬼火のように野間を誘った。

次第に焦燥感で胸が苦しくなってきた。子供のように拳を握りしめ、泣き笑いの顔で、怖くないぞと怖くないぞとつぶやいた。

何か幅のある暗いものが走り過ぎるように、ゴーツという風の音が梢を渡っていった。全身総毛立つような寒気が皮膚を撫でた。

鉄色の腐った枝に片足がひっかかった。片手で体勢を整えようとしたとき、突き出した溶岩に膝をぶつけた。一瞬目から火が出るほど、痛みが走った。

一惨めな思いでようやく前方を見上げると、霧の中に黒い蓑虫のようなものが見えた。

それはいかにも頼りなく、ひっそりと淋しげにぶら下がっていた。

何かを問いかけるように、首を傾げて宙に浮かんでいるようであった。痩せた若い男性のようだ。黒い髪にまだ光沢がある。

野間育郎は、しばらく茫然としていた。

この森に入った時からこのような光景に出会う予感がしていた。不思議にも、屍体を発見した恐怖や悲惨さはなかった。山中で熊や蝮に出くわしたような、不意打ちの驚きであった。次々と木立を流れてくる白い霧が、一瞬だけ遺体を隠し、霧が吹き消されると、再びそれはあらわになった。

殉教者の刑のようにも見えて、侵しがたい威厳すら漂い、むしろ神聖な感じすらした。

霧は白く斜めに移動し木立を包んだ。足下に苔むした大きな灌木が横向きに倒れていた。近寄ろうとすると、曲がりくねった葛のような蔓が邪魔をする。一段上にも低い屏風岩のようなものが並び、これ以上進むのは困難だった。

首を傾げ宙に浮かんでいる男は、何かを告げるためにそこに浮いているように見える。

どこか夢の中の光景のようでもあった。どのくらいの間、この男はこうして宙に浮いていたのだろう。これは自分が初めて発見した遺体だろうか。

奇妙に親近感を感じた。男は、問いかけた答えが得られず、そのまま宙に浮かんで死んでいるようであった。野間は持っていた蠟燭を厚い苔の中に差し込むと、火を灯した。

青紫の煙がひとすじ昇る。霧の内側が金色ににじみ、長い炎がゆらゆらとゆらめいた。

「どうしたの。心配したじゃない。あの崖の反対側を捜してたのよ、あたしたち」

「携帯繋がらなかったね。あれ、嘘だと思ってたんだけど。場所によって違うみたいだ」

「よかったわよ。樹海の犠牲者を一人増やさないで」

「きつい冗談ですね」野間は抗議する力もなく笑った。

「野間さん、何て顔してるんだろうと思いましたよ。鳶の藪にへたり込んで、口を開けて空見上げてたんだから」

蠟燭を灯したあと、彼は夢遊病者のように数十分ほど繁みの中を歩き通していた。どこかで意識が混濁したに違いない。そういえば最近はあまりまともな食事をしていない。

「もう帰らなきゃね。寒いから、これ着なさいな」

座間圭子が肩に自分のコートをかけてくれた。次第に温かさが広がり涙がこぼれてきた。西の空には、桃色と紫色を帯びた光る魚の群れが泳いでいるようであった。

「何か見たの」

「いや、何も」

「いいのよ話さなくて。ショックだったのね」

彼はあの首を傾げて吊られていた蓑虫のような男については何も語らなかった。本当にあれは縊死体だったのだろうか。大きな鳥の巣か何かであって欲しい。

車は小石を強く弾いてバックした。霧はようやく晴れてはいたが、林道は青みを帯びた鉛色に染まり、周囲はいつそう暗くなっていた。



世の中にも家庭にも居場所のない宙ぶらりんの野間育郎は、ひたすら歩いているか、山手線のメリーゴーランドに乗り込んでいるしかない。

その日は久しぶりに、代々木公園の遊歩道を散歩した。遠方の木立の向こう、青灰色の尾長鳥たちが明るい芝生で羽を休めている。いかにもずるそうな黒い鴉が数羽、その上の枝で嘴をこすりつけている。

乳白色の空、白っぽい小さな太陽。薔薇園は陽射しを浴びていた。手押し車に乗った銀髪の老人が、赤と白の薔薇のアーチをくぐり抜けていく。大きな日よけ帽を被った中年女の介護人が、身を屈めながら何か話しかけ、ゆるゆると押してゆく。

昼下がりの原宿を歩いた。雑貨と菓子類とブロマイド写真。むんむんする熱気。彼はソフトクリームを買った。勤め人姿なのでいかにも似合わない。アイスを落とさないよう、若者でゴった返す竹下通りをすり抜けて、東郷神社周辺のひっそりとした森へと逃れた。鬱蒼とした暗緑色の樹木、湿って苔むした古い竹の柵。さりげなく木陰に止めてある黒塗りの高級車。ここは静かで木陰の多い一画だった。

野間育郎は、昔からこの記念館の日本庭園に棲みついた石亀を見るのが好きだった。どこから水を引いているのだろう。池では何匹かの亀が岩の上で一日中日向ぼっこをしている。ベンチに座ってソフトクリームを舐めながら、一人で悄然と亀を眺めた。

飛行機がゆっくりと上空を飛んでゆく。細々とした透明な虚しさが雲の帯を描いた。

倦怠感で全身を覆い尽くした野間は、区立図書館に入った。明るく採光性の良い、しかし無機質なエントランス。児童書の前で子供をあやす若い主婦たち。初老の暇人たちがソファを陣取り、呆けた顔で時間を潰している。あくびが移りそうだ。明るいカーテンを背景にパソコンが並んでいる。

—そうだ、ネットを覗いてみよう。彼は雑誌コーナーの近くにあるパソコンの前に座った。しばらく幾つかのブログを斜め読みした。ふと、ひとつのサイトに目がとまる。

『告発！「山手線環行会」を名乗る「山手エソテリック教会」への疑問と糾弾』

しばらく読み進んだ後、あの越川老人の集会であることに気がついた。

「山手線内部でさまざまな勧誘を行う『山手線環行会』なる団体が出発しています。彼らの計画と行動は、はなはだしく危険であり、反社会的な要素が認められ、善良なる市民として看過することはできません」

語調は穏やかではなかった。見覚えのある越川老人の若い頃の写真が掲載されている。鼻筋の通った精悍な風貌だが、どこか陰惨な影がある。彼の経歴の中に「精神に異常をきたし」の文句があった。あくまでもこの告発サイトの管理者の視点である。

ホームページの要点は以下のものであった。

――都内某所に「山手線環行会」を名乗る「山手エソテリック教会」なる団体がある。元国鉄職員の越川英之輔は、激烈な組合運動への参加の後、国労解体へと向かう八十年代後半、睡眠薬、抗精神薬を常用。たびたび幻覚・幻聴に悩まされる。

越川は、退職後に精神的な価値を見直すための「行脚の旅」と称して、さまざまな宗教団体を転々とする。この時期に、東洋思想や神智学を混淆させて、暗いオブセッションに根ざした危険な教理を創出。形而上学的奇想に満ちた妄想の体系を構築した。一九八九年、越川は中央線にて飛び込み自殺未遂。しかし目前に神秘的な《光の雲》が現れたという。雲の高次元内部世界にて、生と死の秘密を解き明かされ、自死を思いとどまったとされる。

この年は、教会では啓示の年とされ、翌年には、山手線環行会、別名、山手エソテリック教会を設立。以後、山手線や中央線などでしばしば「セレモニー」と略称される蠟燭を用いた強引な死者追悼供養の儀式を強行する。事前連絡もなく複数メンバーが駅のプラットホームや階段を占拠し、蠟燭を灯し始め、祈りや合唱を行う異様な儀式である。自殺を匂わせる挙動不審者への声かけ、プラットホームにおける説得などの活動を展開。当時から事実誤認など乗客との悶着が絶えなかった。これらの行為によりしばしばJRや私鉄とのトラブルとなる――

「この団体固有の教義としては、二〇一〇年代のある日、東京上空に巨大な怪物雲が出現し、すべてを浄化するという予言を公表していることが挙げられます。この雲は、アスペラトウス雲といい、近年、世界各地で異常気象のため出現する特異な雲を指しています。しかし、アスペラトウス雲の存在は、アマチュア気象研究家が新種の雲であるかの如く喧伝しているだけで、WMOなど権威ある気象学会では、現時点において正式認定はされていません。のみならず、越川は自身の作り上げた終末論的迷妄神学をそこに盛り込み、会員たちをミスリードしています。

アスペラトウス雲こそは、越川英之輔の体験した啓示の際に出現した《不可知の雲》の母体であり、その《大いなる不可知の雲》、が人々の魂を浄化するべく東京上空を覆うという、愚劣な神話の捏造です。天国、パラディソはこの雲の中に秘められていると説かれます。これがどんなに危険な発想であるかは、怪物雲が東京を覆うその当日に、教会員有志の中から天人冥合・脱身昇天という儀式を……」

同じページにはあの怪物雲アスペラトウス雲の写真が掲載されている。一子の顔写真も掲載され、「悪魔ツ子、一子」とのキャプションが入っている。

その脇には、どこの駅だろうか、夜のプラットホームの両岸に、蠟燭を点々と並べて灯している祈祷集会の写真があった。まるで精霊流しか送火のように、藍色の闇の中に金色の炎がゆらめき、美しく幻想的に写されていた。

しかし野間が戦慄したのは次の指摘であった。

「山手エソテリック教会の危険な活動としては、強引な蠟燭祈祷儀式の他にも、鉄道自殺者の減少を目的とするという特殊集団、サルベージン・チームを結成していることが挙げられます」

パソコンから疲れた目を上げると、絹色の太った蛾がカーテンにしがみついていた。夏の夜の電灯などに吸い寄せられてくる、葉脈のような触覚を持ったこりこりとした腹部を持つ大きな蛾であった。

「最も危険な考えは、轢死者の供養と称して、教会員自らアンダーゾーンへと飛び込む行為です。このアンダーゾーン、別名インフェルノは地下の霊的空間を意味し、自殺者の多い路線地域に形成されているとしています。この神聖な行為を彼らはアンダーゾーン・サルベージョンと称し、実行者は内部では『潜水夫』と尊称されます。これまで山手エソテリック教会のこの儀式に自ら身を投じた者は、山手線をはじめ、中央線、西武池袋線、東横線などで少なくとも六名以上が確認されています」

自殺者の魂を救うため自ら飛び込む。人身事故を無限反復する。つまり会員自らが飛び込み自殺を図るのだ。あの朝井優一というはにかみ屋の若者は「潜水夫」と呼ばれていた。

「この危険なアンダーゾーン・サルベージョンを防止するためにも、一刻も早く、山手エソテリック教会、および、越川英之輔代表の告発に、ご協力ください！」

このウェブサイトは最後にこう結ばれていた。野間の顔から血の気が引いた。図書館の天上や壁が色彩を喪失していた。何ともいえぬ脱力感でしばらく立ち上がれなかった。これはあくまでこのサイトの視点なのだと自分に言い聞かせた。

青白い双葉のような触覚を持つ太った蛾は、いつのまにか向きを変えカーテンの上の方に移動していた。



火曜日の晩、九州南方の南大東島では海が大荒れに荒れた。

大気は不安定をきわめ、大型で強いと予測される台風九号が接近していた。凄まじい風雨の中、堤防近くの椰子の木が大きいたわみ、港に停泊している漁船の群れが、白い波しぶきを被って上下している映像が流された。

翌日からは、沖縄、九州方面が集中豪雨に襲われた。鹿児島では、何力所かで大きな土砂災害があり、山間部に孤立した数家族の民家に対して、自衛隊ヘリコプターでの救援活動が行われた。宮崎では、川縁に建てられた老人ホームの建物が真ん中から紙箱のように崩れ、褐色の泥水とともに押し流され、一人が行方不明、二人の年寄りが犠牲になった。帰宅途中の小学生たちは、帰路で豪雨に襲われて学校に戻り、そのまま体育館で震える夜を過ごした。

九州各地においても各地で土砂崩れ、大量の流木、廃材による道路の寸断、電話回線の不通が生じ、地方都市でも店舗の床下浸水が進んだ。駐車場に停めたトラックが、池に沈んだ小舟のように浸かっている映像が印象的であった。

野間育郎は、最近常宿にしている新大久保のはずれのカプセルホテルでこのニュースを知った。風雨に向かって、傘を鋭く突き立てながら進み、ついに金属骨が折れて傘がぺしゃんこになった若い女性の映像も報じられた。びっしょり濡れた薄いブラウスから下着と豊満な体型が透けて見えた。

この時点ではまだ、東日本や東京在住の人間達は、それを不謹慎な冗談にできるだけの余裕があったのだ。崩壊した民家の不幸に同情こそすれ、他人事のようにニュースを見ていたわけである。

野間は、他の客が薄汚いソファで居眠りしていることを良いことに、リモコンを独占し、チャンネルを次々と変えた。

ある民放で、とある民家の背景に異様な雲の群れが湧き出している映像が映し出された。複数の狂ったような渦巻きを連ねた立体的な力強いうねり。雲の群れというより宇宙の果てから到来した暗い渦状星雲を思わせた。

威嚇的な閃光を発しつつ、よじれたような大きな裂目を作り、奥の中心部から無限にもくもくと湧き起こる魔物のような暗黒の巨大雲――。

「あれは……アスペラトゥス雲」

野間は持っていたコーヒーカップを、落としそうになった。

越川老人とはしばらく会っていなかった。公立図書館で例の告発サイトを見た後、山手線に乗車することすらあえて避けていた。あれだけ穏和な老人が、不吉な集団の代表ととはどうい思うことができない。かつての組合の闘志だったとはいえ、普通すぎるのだ。

確かに彼自身が失職して以来、頼れるものもなく、どこか心が折れそうになり、時には幼児化すらしているような気がする。たえまなく不安が増し、世界全体が自分を責めるような気がしている。すでにまともな判断力を失っているのだ。

ある朝、駅のトイレの洗面所で髭を剃りつつ自分の顔を覗んでいるうち、熱を持った白い仮面のように、ぐにやぐにやに歪んでいくのに気がついた。これが変成意識を体験した代償というものだろうか。野間は最近の脅迫神経症に対する具体的な対処法が欲しくなった。そして、彼らの行為の正当性をもう一度問い詰めたくなり、居ても立ってもいられなくなった。

東京は重苦しいような曇天だった。西日本はすでに激しい豪雨である。東海地方の海も荒れているらしい。

携帯電話で連絡すると、一時間後に新宿駅から乗り込むという。その時間に野間は合わせて電車に乗った。

白髪の穏やかな老人と目が合い、軽い会釈を交わすと、どうにも気後れした。一子はドロップの缶を与えられ、オレンジ色や葡萄色の飴を一個ずつなめている。この無心な顔を見て「悪魔ツ子」とは思えない。

何もこの今になって、あの告発サイトのことをわざわざ尋ねなくてもいいだろう。聞こうと思えばいつでも聞けるのだ。

――田端駅に車輻が滑り込むと、不意に空気が変わった。

異様な沈黙を抱えたような二十人以上の人間が、しずしずと乗り込んできた。

彼らは全員、黒い礼服を着用していた。駅の近くで葬式があったらしい。黒づくめの服と、蒼白な表情のよそよそしさ。周囲の乗客は空気の変化を読んだのか、目を伏せた。

数人の女性は胸に花を差し、帽子の下に黒いベールを垂らしている。彼らの周辺から、何ともいえない冷え冷えとしたものが漂ってきた。一人の女性は、黒縁の写真を持っていた。野間はその写真の男性の顔を見て、血の気が引いた。まさかと思った。先日電車で会った若者だった。「潜水夫」「ダイバー」と呼ばれていた。ほとんど純真な少年のような顔。確か朝井優一といった。しばらくすると、葬式の参列者たちはこちらを見て、ひそひそ声で話している。警戒されているのではないか。

野間は疑心暗鬼に陥った。

礼服姿の一行の中から、一人の髪の長い女が歩んできた。

越川老人の前に佇み、意味ありげな視線を交わした。

「無事、終了いたしました」

野間は息を飲んだ。

「そうですか。終わりましたか。そうですか」と老人。

女はハンケチで目頭を蔽って「優一君は、立派に使命を果たしました」と声を震わせた。大粒の涙が、くたびれたような光線を浴びている床に、ぽたぽたと落ちた。

「あんなに若いのに。とても、立派に」女は嗚咽をあげた。

「自ら望んだことです。……幾つでしたかな」

「ちょうど、二十歳」押し殺したような声で、女はいった。

その髪の長い女は新人養育係の座間圭子だった。彼を樹海に誘ったアイシャドウの濃い女である。

あの時のはにかむような顔をした色白の美少年を思い出す。この春にやっと入学したての大学生、もしくはまだ高校生三年生ぐらいのようにも思われた。

「ごくろうさまでした。今夜は静かに彼のために、心を込めて蠟燭の儀式を行うことにいたしましょう」

越川老人はこともなげにいった。この人物は人としての感情が欠落しているのか。もしくは何か人間的価値を超えた別次元を見てしまったのか。

繻帯だらけの一子は、ほっぺたの片方をふくらませてドロップをしゃぶっていた。

痩せた白髪の老人には毅然とした鷲のような威厳があり、どこか古代の異教の司祭のようにも思われた。クェスチョンマークのような杖は呪術師めいた趣だった。

野間が周囲を見回すと、いつのまにか黒い礼服姿の男女で囲まれていた。

他の乗客はこのあたりを避けるように移動している。

斜め前には、黒いアーモンド型の目をした女と、茶褐色の髪をカールさせた女が座っていた。

無知な若者を冷たい水底へと誘うローレイの人魚たち。しかし今は二人とも目を大きく見開き、血の気を失った蠟人形のように青ざめている。アーモンド目の女は正面を向いたまま、放心したように朝井少年の黒縁の遺影を抱いていた。

越川老人の考えていることがわからない。

そのくせ長老然とした風格を前にすると、なぜか糾弾しようとする気持ちが萎えてしまうのであった。

日本列島をゆるゆると北上しつつある大型の台風は、次第に猛威をふるい始めた。

九州全域を水浸しにした後、この台風の爪痕は、山口、和歌山の山間部で、無惨な土砂崩れを引き起こした。さらに岐阜、長野、静岡の各県では、崖崩れや洪水による数人の死者、行方不明者が発生した。暴風雨の只中、雨具に身を包んだ若い女性アナウンサーは、強風に飛ばされないよう前屈みになり、かじかんだ両手でマイクを必死に握りしめた。

根こそぎ折れた杉の大木、濡れてふるえる痩せ犬、倒壊した木造家屋、ばたばたと打ちつける風雨の音。避難先の地元小学校体育館で、駱駝色の毛布にくるまり不安な一夜を過ごす独居老人の顔のアップ。無惨にもU字型にえぐられた山林の赤土の断面が、上空で待機している報道ヘリコプターから、何度何度も写された。その背景を茫漠たる暗雲がどこまでも厚く覆っていた。

アスペラトゥス雲という茫漠たるぶあつい繭が、日本列島を包んでいた。暗灰色の繭の中ですべてが圧縮され、液状化され、消化分解しつくされる。人間は内部で一滴の葡萄酒色の汁となる。野間育郎は、何をやるにも息苦しかった。急に血液が濃くなったかのようにドクドクと脈打ち、不安が高まり、呼吸が激しくなった。この世界の出口が、不意にすべて閉ざされてしまった。神とも魔ともいえぬ見えざる手によって、人間世界の四方八方が陰鬱な雲で密閉される恐怖。キリスト教徒のいう審判の日とはこのようなものか。

一あの「告発」サイトを見た後、野間は他のホームページでも、山手線環行会こと、山手エソテリック教会について触れられているのを発見した。

越川英之輔氏については、詐欺師、極悪人、人殺しなど、口を極めた悪評が多く、野間の知っているあの温厚な老人とはとうてい同一人物とは思われなかった。あの集会は小さな内輪だけのサークルだと思っていたのに、この状態ではいつ新聞やテレビの報道番組で取り上げられ糾弾されてもおかしくはない。越川会長自身はこの批判の嵐を全く知らされていないのだろうか。

また、一部のゴシップ掲示板では、例の繙帯少女を目の敵にしていた。悪魔っ子、魔物など、悪意ある酷評が目立つ。たかだか七、八歳の少女に対して、異常なまでの物言いだ。越川老人がいないときには、教会員達を怒鳴りつけるのだという。それどころか、赤ん坊のほっぺたにいきなり噛みついて泣かせたり、髪の毛をひっぱったり、びんたを喰らわせたりと、野生児のような振る舞いをするという。それでも幹部会員からはまるでお姫様扱いで、そこにこの偏執狂集団の異常さがうかがえるというのだ。しかし越川老人によれば、この繙帯娘は、「もともとは天使のように愛らしい子なのに、人々の悪念を受けて、ひどいアトピーになっている。情緒不安定なもの、小さな体で一生懸命、人々の悪意を背負っているせい」なのだ。確かに繙帯をとって綺麗に髪をとかしたら、ついでに歯科矯正の針金も外したら、夢見るような瞳をした天使が出現するかも知れない。顔立ちがアンジェリックでどこか日本人離れしている。

しかしサイトの管理者は、決定的な追い打ちをかけていた。越川会長は、周囲には一子を自分の孫だといっているが、実は以前、教会員の女子大生に生ませた子供で、彼女はその後、精神を病んで東小金井駅付近で飛び込みを図ったという。しかしこれは一部で指摘されているだけで、

確認はとれていない。あくまでもネット上の噂話に過ぎないのだ。事実確認もせず「轢死」のイメージを頻出させることで、山手エソテリック教会のダメージを謀っているに違いない。越川老人を貶めるために捏造されたフィクションの可能性もある、と、野間は自分自身を意固地に納得させた。

木曜日の早朝、湘南の海でサーフィンをやっていた中年男性が、波にのまれて死んだとのニュースが流れた。出勤前にいつものように軽く波乗りをしようとして、あやまって溺れたらしい。すでにこの時、神奈川や房総沖の海も次第に灰色に荒れ始めていた。

同日十時頃のことである。

野間は西新宿の歩道橋を歩いていると、低く垂れ込めた湿った空を膨大な黒い鳥たちの群れが、追われるように飛んでいくのを目撃した。ひとつの群れが終わると、また次の群れが続く。さらに蒼黒いハーフミラーのビルの背景からも、数百羽の群れが湧いて出る。

いったいこの東京近辺に、どれほどの鳥が潜んでいたのだろう。野鳥たちの群れは上下に幾層も成して渡っていく。地上からは何の鳥かは分からない。ただ黒い点描のように空を覆う。ことによると複数種の群れが同時に飛んでいるようにも見える。他の通行人たちも足を止め、ハンケチを額にあてて怪訝そうに曇天を見上げていた。

下界を不吉な光が支配していた。風が起こり、埃っぽい匂いが路上に立ちこめた。これは世の滅ぶ兆しなのか。からからと音を立てながら舗道を紙コップが転がってゆく。

次第に東京上空が、ねばりのある厚い雲の層に包囲されつつあった。ゆがんだ変成岩の地層のような妖しい模様。じっと見上げていると、なぜか眩暈がし、嘔吐感が込み上げてくる。溝川に薬品を流したような縞模様。銀色ともコバルト色ともいえぬ雲の群がり、陰影を帯びた立体層を形成して高層ビル群の上空を、あとからあとから舐めるように流れてゆく。密閉する巨大雲の天井のために都市全体が洞窟内に入ったかのように思われた。

不安げに見上げる人間たちの遙か上空を、数十分間にも渡って、何万という鳥が東の方へと移動してゆく。焦燥感から凶暴になっているのは殺人スズメバチだけではないようだ。

野間は歩きながら鼓動が早くなっていくのを感じていた。ひととき歩道橋の手摺りにもたれかかる。息苦しいのだ。血液が脳や心臓部を脈打つように流れるのをじかに感じる。まるでこの世という空間そのものが、上から下から四方八方から、ぎゅうぎゅうと締めつけられる感触だった。西の空が、発光したような妖しい黄色味を帯びていた。湿気がひどかった。太陽光線に硫黄のような病的な色が混じっていた。これは普通の台風ではない。建物、タクシー、街路樹、あらゆる風景が不思議な銀色を帯びている。

湿った埃っぽい風が、あちこちの道路の端を吹き抜けていった。生温かい悪魔の吐息のような風。くるくると舞い上がる新聞紙。電柱や壁に貼られた安っぽい風俗広告が、びらびらと風に吹かれた。不意に舗道で、OL達が悲鳴を上げた。下水道に棲んでいるはずの大型の鼠が路上に乗り出し、発狂したように走り回っている。道路端で黒兎ほどのどぶ鼠が、恐怖に駆られて疾走する光景に、啞然とさせられる。地の果てから吹きつける法螺貝のような風の音が響いた。褐色

の埃がひゆるひゆると舞い上がる。嵐の前の血が騒ぐような焦燥感が東京という都市全体を支配した。

昼前に、携帯電話に連絡が入った。越川老人からであった。

「ついにアスペラトゥス雲が、東京上空を覆う日がやってきました」

それが第一声であった。

「われわれのたゆまぬ環行が想念のリングを形成し、ついにあの雲をここまで呼び寄せたのです。……じつは奄美大島あたりを荒らしていた頃、ついにその日が来たと疑っていた。遅くなりましたが、それで今朝から会員の方に慌てて連絡しているところです。私が、常日頃からいっておりました浄化と祝福、天人冥合、脱身昇天の日が、ようやくと実現した。善悪の彼岸に浮かぶ雲。天のアーラヤ識。これで溜まりに溜まっていたマイナスの想念や鬱の塊りが、洗い流されます。これは良き知らせです。祝福です。大いなる禊です。鉄路の下の幽冥界が、燦然と輝くパラダイソへと開かれる日。それでは山手線で会いましょう。今日は、駅という駅からみんな乗り込んできますのでー」

昼過ぎ、野間育郎は山手線の中にいた。ひさしぶりに贅沢をしてビジネスホテルに泊まったので、風呂にも入り髭も剃り、さっぱりしていた。もう四十を過ぎているのに、儉約のため公園のトイレ脇で野宿するか、ネット喫茶で夜を過ごしていたのである。

山手線の窓が叩きつけるような大粒の水滴で弾かれ、白く煙ってきた。不安そうに外を見る乗客たち。三時頃には東京の空全体が青痣のように暗くなってきた。どの高層ビルも雲を背負って押しつぶされるように見えた。遠雷が低く鳴り響き、閃光が下界を威嚇した。天気予報によれば各地で集中ゲリラ豪雨が襲っていた。

車窓から覗くと、駅の階段にも雨が吹き込み、色とりどりの傘でごった返していた。

野間が列車の人混みを掻き分けていくと、奥の車両に、越川老人と一子が目を閉じて座っていた。近辺を会員らしい男たちがガードするようにそれとなく囲んでいた。

なんだかその車両だけは、他の箱とは違う雰囲気を感じられた。

「おお、間に合いましたか」越川老人の顔がにこやかに緩んだ。

「いよいよですね」

「そう。すべてはこの日のためのエクササイズでした」

繻帯娘の一子も、にやりと笑った。初めて微笑んでくれたような気がした。

雷鳴が起こった。閃光が闇を走り、車内がどよめく。一子は稲光がある度、両手で「ピース」の格好をして、鬼の子のようにご機嫌だった。

「私は今夜、アスペラトウス雲への奉納の儀式を行います」

「儀式ですか」

「ええ。どこか手頃なビルの屋上に登って、あの雲に祈祷を捧げるのです。そのためにはるばる遠いところを来てくれたのですから」

「わたしも……」一子がいった。「雲とお話するの」

袋からドロップを取り出し口に投げ入れた。愛らしい、と野間は初めて思った。

個人的に相談したいことがあったのに、越川老人は他の会員二名とひそひそ話を始めていた。何か重要な予定でもあるのだろうか。三人の背中を眺めながら、話に割り込むこともできずに、彼は忸怩としていた。

「野間さんですね」袖を引かれた。

振り向くと、一緒に樹海に行ったコメディアン風の男、伝田栄作がいた。

「よかった。間に合いましたね。いよいよ、アスペラトウス雲により、この東京が浄化される日です」

「ええ。会長先生から連絡があって、あわてて乗り込んできたのです」

「あなたは熱心だったから、きっと報われますよ。環行内観という常識では馬鹿げた虚しい行為に賭け、精進を重ねてきた。われわれは、すべて分かっていますから」

伝田はニカッと薄気味悪く笑った。笑うと銀歯が覗くのだ。

「今夜は、日本列島を覆う集合的無意識から、解放されるのです。憂鬱という暗い波動からね。」

日本人すべてが、本当はこれを待っていたのです、われわれ自身が、巨大な鬱の繭を作り上げていた。暗い心の粘液を蚕のようにせつせと吐き出してね。それは一億人の自縄自縛状態だった。年間三万人の自殺者はその犠牲者です」

「一億人の自縄自縛、ですか」

偏執狂のような異様な目をして、伝田は続けた。

「アスペラトウス雲が起こす異変は、心の闇や、自殺衝動や、魂の病いを洗い流してくれる。これは抗精神薬など薬物による対処療法ではない。ついに、人々の巨大なア－ラヤ識そのものが、天いっぱいむき出しの表象となって出現する。そして豪雨の姿をかりて日本人の精神の闇を治療する。光と闇、浄化と祝福の雲一。われわれはこれを何年も待っていた」

それは完全な越川教信者の言葉であった。

「精神の闇の治療。でも、もしそうなったら素晴らしいことですね。私も、生まれ変われるかも知れない。このつまらない自分を、野間育郎を、まるごと更新できるかも知れない」

洗脳されつつある野間もまた、薄く唇を震わせた。

「そう。想念界が一変します。山手線に飛び込む者も、富士の樹海を彷徨う者もいなくなります。現代人にかけてられた呪いのような鬱塊も霧散し、自傷行為や自殺者の数も、潮が引くように激減する。灰色によどんだ繭は、ついに裂けるのです。ゆで卵の殻のように。そうなりや、人それぞれが発光体だ。爽快にして快晴、どこまでも輝き渡る紺碧の海原のような広大な心。内部からもりもりと力が湧き起こり、さらに増進していく意識の拡大感覚。人生に、価値と生甲斐を発見する。そう。魂が燦然と点灯し、世界を壮麗に照らすのです」

いつもはシニカルな伝田栄作が、目尻に狂気じみた緊張を示していた。

「……そんな夢のようなこと、あるのでしょうか」

「だからこそ、まさに、意識革命なのです」

野間育郎の頭の中に、一瞬、蛍のような光が宿った。すると急に、酢のように鋭い悔恨が、喉元に込み上げてきた。

「はっきり言って、私、自分が嫌いなのです。こんなもの、潰してしまいたいのです。小心翼翼と、作り笑いばかりして生きてきた、無価値な、生ゴミのような、かわうそみたいな、こんな野間育郎なんて男は」野間は拳を握りしめる。

伝田は肩に手をおき、慰めるように頷いた。こう見えても本当は優しい人に違いない。さらに弁解するように野間は続けた。ハンケチを取り出し、嗚咽すら混じり始めた。

「私はこれまで……生きたいようには、生きられなかった。それどころか、気がつくど、自分が怖れ、軽蔑し切っていたような男に、なり果てていた。臆病な、嘘ばかりついてる、無能な……いや謙遜でなく、本当に私、無能なのです。もう取り返しがつかない。いや、何もおっしやらないでください。分かってるんです。私はね、ただ……」

「野間さん。一汝、己を憎むなかれ、です」

伝田は低く呟いた。その時、彼の携帯にメールが入り、こちらに目配せした。

「気をつけてください。ポリが入り込んでいます。われわれは狙われています」

「追われているのですか」ハンケチを鼻に押し当て、野間は脅えた。



「鉄道警察ですよ。自殺幫助だの迷惑防止条例だの何だの、連中、かなり前から難癖をつけてきてね。蠟燭の儀式にしろ他のボランティア活動にしろ、われわれはあくまで自己責任ですべてやっているの、越川先生に強制されているわけではない。会長先生の周辺はいつもガードされています。すべての車輛にわれわれの見張りや伝令がいるのです。何かあったらすぐに逃げられるようにね。そんな中で貴方は個人的な教えを受けられた。幸運な人です。羨ましい」

伝田は人混みを掻き分け、越川老人の座っている席に近づいた。そして耳打ちをした。すると、了解したというように老人は頷き、片手にステッキ、片手に一子の手を握り、ぎくしゃくした腰つきで奥の車両へと移動した。

バンという衝撃音を立て、車窓のガラスが鳴った。猛烈な風と共に、内回りと外回りの車輛がすれ違った。

怖ろしいほどの豪雨が窓に叩きつけていた。銀の水玉がガラスに弾かれ、震えるようにつぶされて、斜め並行に走ってゆく。除湿中なのに車輛内は猛烈な湿気であった。不安げな私語が多くなった。突然、烈しい稲光でビルが青紫色に浮かび上がった。暗紫色の西空いっぱい、金色の「人」字を二つ並べた稲光。次の日暮里駅で臨時停車するというアナウンスが告げられた。雷で再び車内は明るいオレンジ色に照らされた。乗客は騒然とした。

ふと見ると、本が一冊落ちている。彩色に見覚えのある本だ。一子が開いていたダンテ『神曲』の手作り絵本であった。

野間は腰を屈めて手に取り、越川老人の後を追った。

大空の中心を縦に裂くような雷が、駅構内を真昼のように浮かび上がらせた。人々は呆気に取りられて立ち尽くす。いま越川老人はエスカレーターを降りていった。長身の痩せた影が沈んでゆく。早く追わないと見失ってしまう。野間は、絵本を鞆にしまい込むと、エスカレーターに飛び乗った。

乳色、暗銀色、蒼黒色、幾層もの建築物のような壮大な雲の塊が、異なる速度で移動してゆく。駅の窓から見上げると天空を進む大艦隊の影のようだ。痛いほどの雨が横から吹き込む。商店街の旗がばたばたとふるえた。駅前周辺は傘を差した人々でごった返している。すでにタクシー乗り場は多くの客であふれていた。パチンコ屋の前に小さな濁流ができていた。波状の雨は、何度も何度も散布されるように叩きつけてくる。折り畳み傘ではこの豪雨は間に合わない。容赦なく降りつける雨。つるつるの黒いボンネットを晒した車は路上で水に浸かり往生していた。アスファルトの上には白い火花のような水飛沫。冷えてきた。髪もシャツもぐしょ濡れだ。

土砂降りの風雨の中、老人と娘は狭い路地へと入っていった。大きな傘と小さな傘。強風に奪われないよう支えているだけで精一杯だ。周囲は雑居ビル。何台もの自転車が針金のように絡まりあって倒れていた。頭をビニールで覆って慌てて走っていく者。閉じられたシャッターの前で不安げに雨宿りする中年夫婦。路地の向こうから鉄砲水のような濁流が押し流されてくる。野間は、何度もくしゃみをした。急激な気温の変化で風邪を引いたらしい。熱もある。どこかでこの風雨をしのがねばならない。

銀色の水煙の幕に包まれ、老人たちが小さくなった。

やみくもにバイクが路地の隙間に入り込む。二人は泥水を浴びせかけられて立ち往生していた。野間は怒りを感じた。

次の路地裏を通りぬけると、越川老人は、とある雑居ビルの前に佇んだ。しばらく品定めするかのように見上げた後、大小の傘を閉じて、小さな裏の出入口に消えていった。

少し寒気がしていた。頭痛が始まってもいたが、無理に元気を出して見失いがちの二人の後を追う。

建物内部には、暗い階段脇にジュラルミン製の郵便ポストが並ぶ。安っぽい雑居ビルだ。

このビルの下の方までは旧式の市場めいたスーパーらしい。百貨店とあるがデパートというような代物ではない。もともとあった商店街の八百屋や総菜屋、洋品店が寄り集まった六、七階建ての古風な建物だった。

閉店しているらしく狭い階段はひっそりと暗い。エレベーターも灰色の扉を閉ざして停止している。壁にモップが斜めに立てられ、バケツに雑巾が重なっている。

上の方でコツ、コツ、コツと、靴音が響いている。おそらくあの二人だろう。

大声で呼びかけようとも思ったが、尾行の後ろめたさがそれを阻んだ。靴音が響かぬように慎重に階段を登る。

と、一瞬、窓が白紫色に染まり、窓枠の影がゆがんだように壁に映った。しばらく地の底までひっそりとした後に、大気全体が砕けて崩壊するような雷鳴音。

野間は階段を見上げた。すぐ上で鈍い金属音がした。屋上のドアを開いたらしい。

いきなり強風が吹き込んで、小さなバケツが甲高い音をたてて階段を転げ落ちていった。

片手で咳込むのを何とか押さえながら、よろよろと扉の前まで近づいた。

雨に洗われた屋上に、二人の姿が見えた。つまらない松の植木や、アロエの鉢が転がっている。越川老人と孫娘は、傘をばさりと落として屋上を進んだ。激しい雨が二人を叩いた。小さな設備室の脇に薄緑色の貯水タンクが見える。円筒形の貯水槽の側面を、雨水が薄いベールのように、とめどもなく流れ落ちる。

そのタンクを囲むようにして、通りに向けた大きな錆びた古看板が架けられていた。ペンキが剥げ落ち、太い文字も色褪せている。霧に滲むように遠景の青、赤のイルミネーションが点滅している。大看板は風に向かって、船の帆のように猛烈に煽られていた。

細い梯子めいた鉄階段を使えばそこまでは上れるようだ。

このビルではその空間がいちばんの高所であった。

銀色を帯びた上空の雲。煤煙のように移動する低い雲。

黒いビニール袋のようなものが、フェンスの向こうをひるがえりながら舞っている。右に吹かれ、左に吹かれしたかと思うと、いきなり釣られた魚のように、恐ろしい彼方まで持っていかれた。

屋上には、黒鏡のような水溜まりが幾つも出来ていた。烈しい雨が、そこにおびただしい銀の楔を打ち込んだ。赤錆びた看板裏の骨格が見えた。両端から雨が流れ落ちる。大空を渡ってくる

暴風によって、看板すらもベコベコと鳴っていた。

一再びとてつもない白光があたりを支配した。ビルの窓という窓が、発狂したように反射した。貯水槽に向かう鉄の階段を、越川老人と一子が登山家のように前屈みに登っていく。ときおり稲光がストロボ撮影のように屋上の人間を青く染め、思わぬ壁に影を投影させた。

(雲とお話するの)

一子の言葉を思い出した。

強風の中、タラップを登りきった老人が、貯水槽の脇にゆっくりと立ち上がった。

白髪はべったりと額にこびりついていて、服が上下ともぼたぼたと横向きの風にあおられている。

暗い空の下、老人は天を仰ぎ、長い杖を預言者のように持ち上げた。鋏を開いた黒い蟹のような影が、濃い霧に浮かび上がった。

上空では暗紫色のアスペラトゥス雲が、ゆっくりと渦巻いている。聖餐を待ちかまえていた奇怪な雲は、呼吸を荒くし狙いを定めながらとぐろを巻いた。タラップをよじ登ってきた一子が、老人の脇にしがみついた。

ふるえる野間は、雨を浴びつつ目を凝らした。

一子は、するすると自分で繃帯をほどき始めた。

風雨に顔を晒して目を細め、気持ち良さそうに頭を振った。

風は建物の隙間をすり抜け、ビュウビュウと唸っている。水を含んで重たくなった繃帯は、彼女の小さな指から、吹き流しのように風に靡いた。少女はしばらく荒涼とした烈風を楽しんでいた。遠方の闇の二カ所から鋭い稲妻が閃いた。いきなり階段からオルガンを突き落としたかのような振動音。

落雷したらしい。

老人は両手をあげ、何か大声で叫んでいる。風雨に消されて何も聞こえない。

一子は指を離した。繃帯は白い一条の線となり、生きものめいてひるがえりながら、灰色の断崖のような厚い層雲の彼方へと流れていった。

瘡蓋のような繃帯をとった少女の顔は、まばゆく涼しげでアンジェリックな輝きを帯びていた。老いた預言者と、小さな天使。強烈な稲光の度に、二人の輪郭は、前後段違いに一瞬ずれた。

雨風を避けつつ鉄扉付近から、野間は呆然とその様子を眺めた。

ふと、オレンジ色の光が彼の足下を照らした。円い光の輪が左右に素早く動いた。不審そうな顔をした警備員が、階段下から懐中電灯で照らしていたのだ。

「誰か、いるんですかー」

楕円形の光輪が、上下左右に壁を走った。こちらに上がってくる様子だ。

彼は慌てて屋上脇に急ぎ、ビル側面に身を隠した。外階段への通路がある。警備員の光がちらちらと洩れていた。雨は反対側から叩きつけているらしい。霧に滲む町の灯り。藍色の闇の底深く、野間は鉄製の心細い階段を、一段一段、慎重に降りていった。



どしゃぶりの雨の中、商店街の裏路地はそのまま青黒い濁流となった。下水はマンホールの蓋を持ち上げゴボゴボと水を噴き出している。建物の照明の光が水に碎けて錯乱し、ゆがんだ模様を映している。駅に向かうと、山手線はすでに全線運休状態だった。傘を持った人々の黒い影が駅の明かりを背景にロータリーの周りにあふれている。売店で買ったタオルで体を拭う。長い列の最後尾に並び、野間育郎はようやくタクシーに乗り込んだ。

行き先は杉並と伝えた。フロントガラスに銀色の雨の滴が飛び、光を弾いた。

「ひどい雨だねえ。明日の朝までこの調子らしいですよ」

大きな鼻をした運転手が苛立たしげにいった。

「困ったな」

「それでも、あんたはまだまだよ。いま頃あの辺に並んでいる客なんか、何時間かかるかわからないやね。車が戻ってくるのに随分時間がかかる」

ワイパーが左右に機械的に動き始めた。少し寒くなってきた。家からくすねてきた風邪薬を水なしで三錠飲み込んだ。そして鞆を取り出して、絵本がずぶ濡れになっていないかどうか確認した。

稲光に照らされた青白い二人の影。垂れ込めた暗雲の下で、杖を振り上げるモーゼのような老人の姿。繻帯を風にさらした小さな少女。藍色の深い茫漠たる闇の中、するすると翻りながら消えていった、白くて長い吹き流しのような布きれが、目に焼きついている。

一車の内部が温まってきた。タクシーは混雑した道路を進む。温まったせいか、どっと疲れが出て、彼はうとうとと眠ってしまった。閉じられた桃色の瞼の中をしばらく光が点滅していた。

ふと気づくと、信号機の光がまぶしい。商店街の軒先で人々が立ち往生している。ボンネットを濡らした車の群れ。二つ並んだ金色の猫の目のようなヘッドライト。

「参ったな。いつもの道、通行止めみたいですよ。お客さん、ちょっと迂回しますけど、いいですかねえ」

運転手は大きな団子鼻をぽりぽり搔いた。

「仕方ないね」

気分が減入ってきた。意気消沈した犬のように、彼は鞆に顎をのせた。

いまさら家に帰るというのも情けない。しかし台風の前夜、ここまで異常な天候なのだ。とにかく温かい毛布にくるまりたい。二十数年家族のために働いてきたのだ。そのくらいの我儘は大目に見てくれるだろう。そういえば、いつの間にか家族三人が三人とも、それぞれの孤独な鬱の繭に閉じこもり、もやもやと重苦しい暗雲に頭を締めつけられている。その繭を食い破りたい。俺は迷っているのだ。暗い森の中、木の幹を拳で叩き、自分の芯を見い出そうとして中学生のように足搔いている。ひたすらあたりを引っ搔き回し、爪を割り、血を滲ませているのだ。

「ああ、やっちゃってるよ」運転手が舌打ちをした。

スリップしたのか、一台の乗用車がコンクリートの電柱に激突している。パトカーが脇に停められ、警官が走行中の車を指示していた。人工的な冷たい光が、海獣の背のように濡れた道路を鈍く照らす。蒼黒い鱗を重ねたような生垣の前では、幾台もの自転車が崩れるように薙ぎ倒されていた。

黒い空の一点が、みしみしと裂けて、湖面から浮上したかのような風景が映える。深い沈黙の後、ドドドド、バリバリバリバリバリ、と雷鳴が轟き渡った。建物の側面が白亜に起立する。

「なかなか進まないね。どのくらいかかるかな」

「この状況だからね。まったくわからないよ、そんなこといわれても」

運転手は不機嫌になっていた。クラクションを何度も乱暴に鳴らす。ハンドルが荒い。強く叩きつけてくる雨粒は、大量の銀の釘のような光となって、激しく弾かれた。

「わからないことはないだろう」

「この空を見てよ」険しい顔で振り向いた。だんだん険悪になってきた。

「今夜は、まともじゃないんだ」

体が冷え、疲れてきた。咳が止まらない。見覚えのある風景だ。高円寺、あるいは阿佐ヶ谷の近くだろうか。いや似ているがどこか違う。ともかく杉並区には入っているだろう。

「駄目だ。タクシーがあちこちで立ち往生してる。これ以上この道は進めない。ここから先は水路が氾濫して、ほとんど池になっているらしい。万事休すだ。この辺ウロウロしてても、お金かかるだけだよ。どうすんのお客さん」

運転手はぞんざいに後部座席を振り向いた。脂ぎった大きな鼻に醜いでこぼこがある。橋の手前から見下ろすと、川が増水して道まで水が溢れている。川岸の店舗では膝まで水に浸かった人々が、応急処置のような作業をやっている。

「悪いね」の一言で、突き出されるように車を降りた。

厚みのあるドアの音。かなり痛い金額を取られた。タクシーは水しぶきを上げ、もと来た闇へと走っていった。

叩きつけるような大量の雨。汗と雨が胸元でべたべたと混じり合う。

すでに道路は洪水のようだ。野間の足首までが水に浸かる。建物の明かりがゆがんで水面に砕けた。まるでホースで散布されるように、際限もなく波状に浴びせられる大粒の雨。夜空を仰ぐと高さ数十メートルものカーテンのような銀幕が見えた。

遠方の空で激しい雷鳴が響き渡った。フラッシュが焚かれ、空の端が青白く浮かぶ。荘厳なまでの黙示録的風景が出現した。まるで象の墓場のような風景だった。一瞬すべてのビル群が白骨化した。

紺色の空全体を覆っているのは怒りの雲、荒れ果てた海のようなアスペラトゥス雲であった。大きく波打ち、あらゆるものを飲み込むような奇怪な渦は、あちこちで雪の結晶片のような光の模様を放っている。濁った液体がうねるように渦巻きを描きつつ、ゆっくりと対流し上下して

いる。

もう、どれほど歩いたろうか。寒い。体温が奪われている。折り畳み傘などすでに役に立たなくなっていた。アパートの軒先で、母親に抱きかかえられた幼児が泣いている。レインコートや雨傘に身を隠した人々が物の怪じみて見えてくる。商店街の坂を降りると、かなりの店の入口が水に浸かっていた。これが本当に東京なのか。駐車場の車も半ば水に浸かっている。店舗の主人たちが、バケツを持って店内に浸水した水を掻き出している。

次のタクシーを捜しつつ、夢遊病者のような足取りで、豪雨の中を少し進んでゆくと、車のいない前方の交差点で人影が見えた。夜の街灯の下、スポットライトを浴びたように、奇妙にはしゃいでいる数人の若者がいた。銀針のような雨を浴びて歌いながら歩いてゆく。一人の女が髪に両手を当てながら飛び跳ね、くるくると踊っている。

雨が一瞬、ひっそりと止んだ。しばらくの間の不気味な沈黙。都会のイルミネーションが遠方の雨煙に滲む。

「どうなっちゃうんだろ」「なに?」「東京、どうなっちゃうんだろう」「壊れちゃうんじゃない、もう」「壊れてんのはヒロでしょ」

街灯の光の下で抱き合う男女。シャワーのように降り注ぐ大量の雨。

……凄えよあの雷。感電しねえか俺たち、シビレてる、シビレてる、これもう泳げねえ? 泳げよユミ、やめてよ転ぶじゃない……。

踊っていた女が、Tシャツを脱ぎ捨て、水の中に放り投げた。男たちが嘔し立てる。泥酔しているのか薬でもやっているのか、寒くないらしい。女は調子に乗って、水の中を走りながら、体をくねらせて服を脱いでゆく。両手をこめかみにあて、夜空のシャワーでも浴びるように、気持ちよさそうに空を仰いだ。乳白色の裸体が雨煙に浮かぶ。隣で踊っていた男もシャツを剥ぎ取られた。痩せた黄色い上半身が見えた。

野間は寒さでふるえがとまらなくなってきた。水の中で、足を一步一步、前に踏み出す。今夜中に、家に帰れないかも知れない。いまさら運転手を恨んで仕方がない。

「おじさん、元気イ?」と若者が顔を覗く。「なに見てんだ、助平おやじ、死にそうな顔してんじゃないねえよ」「まるで濡れ鼠だな。みっともねえ」「酔っぱらいだろ」

野間育郎を横目に、若者達は嘲けるようにいった。濡れ鼠。かわうそ……。

「まるでローンで首が回らないような不景気な面してるな。俺達こんな奴にだけはなりたくねえな」女の肩を抱き寄せていた男は、言い放った。女はけたたましく笑った。赤いペディキュアをしたつま先で、野間に向かって水を蹴って嘲笑した。白い足指に赤い爪が鮮やかに光った。

一不意に野間は、二人に向かっていった。男に素早く片足をかけられ、彼は転んだ。と同時に、体を離れた女の白い両脚をつかみ、引きずり倒した。全裸の女が仰向けになった。背泳ぎのような格好で水の中で悲鳴を上げる。

すぐさま連れれの男が二人駆け寄って、力いっぱい靴で蹴りつけてきた。交錯する脚と靴の影。顎やこめかみに、重い激痛。さらに痛みが背中に走った。強引に顔を押しつけられ、ごりごりとアスファルトに額を押しつけられた。泥水まで飲み込む。鉄臭い血の味がした。

「こいつ、殺して！」女が叫ぶ。

「警察呼ぼうよ」

「馬鹿、やばいだろ」

最後に猛烈な一撃が、鳩尾に加えられた。

「もういい。かまうな。頭おかしいよこのオヤジ」

野間は水の中で、一瞬目を開いた。水がゆらめいて白い霧が立ちこめた。

ひっそりとした霧の樹木の間、蓑虫のようなものが細く吊り下がっていた。小首を傾げるような格好で死んでいたあの男。忘れられた樹海の孤独な縊死者—あれは自分だと、彼は思った。

意識の一瞬の空白の後、再び冷たい路上に戻った。

彼は水に浸かった鞆を拾い、抱きかかえるように立ち上がった。咳をしながら、額の血を拭いた。そして、何事もなかったかのように正面を睨み、おもむろに歩き続けた。

「お前なんか、死んじまえてんだ」

背後から風の音まじりに、女の罵声が浴びせられた。彼はポケットに手をつっこみ、薬を数錠飲み込む。口を開くとほどなく雨が溜まった。背中にまた雷鳴を浴びた。

それからどのくらい歩いたのだろうか。すくなくとも杉並区にいるはずだ。いたるところが大きな水溜まりになっていた。地図の掲示板を捜したがこういう時に限ってなかなか見つからない。路上の人間もだいぶ少なくなってきた。

低い店舗の向こうに大きなビルが現れた。

黒い影のような建物には、無数の窓が並び、この嵐だというのに、煌々と明かりが点っていた。何かの庁舎のようだ。しかし新宿から離れたこんなところに官庁などあったらだろうか。そのシルエットは、烈しい嵐の波間を進む巨大な幽霊船のように思われた。とてつもなく大きな客船の影。暴風雨は叩きつけるように吹き荒れているのに、その伽藍のような建物には不思議な活気があり、平然と仕事を進めていた。「どこの役所だろう？」野間は呟いた。「しかし、ああやって、必要もない仕事をしているふりをして、血税から馬鹿高い退職金をせりとってるわけだな」いや、あれは、自分たちだけ洪水から助かろうとしているノアの箱船かも知れない。そう思うと急に怒りが湧き出した。窓に映る黒い影が、牛や、馬や、山羊たちが、背を丸めてもっもらしげに事務仕事をしている姿に思えてきた。

風邪薬が効いてきたのか、体中が熱っぽくなり眩暈がしてきた。

幽霊船の先を過ぎ、野間は暗い建物の狭間を進んでゆく。

ゆがんだ黒鏡を連ねたような路面に、たちまち連射されるおびだしい銀の飛沫。それは永劫に雨の降り続ける呪われた夜の都市のようであった。

野間育郎は、その闇の底を飢えたかわうそのように、水を掻き分けて進んでゆく。

目を凝らしていると、川のようになった道路の中心を流れて来る女の死体を見た。それはオフィーリアのような花嫁姿であった。水流の中に半ば沈み、彼の脇をすり抜けた美しい白無垢の花嫁は、目を薄く閉じ両腕を下腹部で組み、夜の道路の真ん中を哀しげに流れていった。半ば薄く透けた死装束のようなその衣装は、海月の繊毛のようにエロティックに水中でゆらめいていた。それはまた一束の白水仙のようでもあった。

と、突然、妖しくも美しかった瓜実顔は、みるみる妻の満子の肉づきのよい顔に変化した。満子オフィーリアはぎろりと目をむき、老婆のような嗄れ声で「こんなはずじゃ、なかったのよ」といい放った。怖ろしげな白い生首を、こちらにねじ曲げたままで流れていった。

朦朧としている彼の頭上に、雲が閃光を放つ。

遠方で数台の水に浸かったタクシーが、街灯の光を冷たく弾いていた。闇が賑わい、どこから湧いてきたのか水面におびただしいアヒルが現れた。泡のように現れたのは、幼児がお風呂で遊ぶ黄色いアヒルのビニール玩具だった。小さなアヒルたちは明るく口を開いたまま、通行人のように次の角を折れて先を急いでいった。明るい狂気の気配がした。

「暗い森……。暗い森、暗い森……」

ここは樹海の迷い道に似ている。生ぬるくも腐敗した水垢のようなものが、身から削ぎ落とされていく。体が痛むほど心が裂けるほど、余分なものが削られていく。「人生の道半ばに迷う暗い森」人影のない豪雨の中、野間育郎は呪文のように唱え続けた。顔を夜空にかざすと、アスファルトにこすられて血が滲んだ彼の顔を、新たな雨粒が洗い流した。



疲労と体の冷えて、関節のあちこちが痛んだ。水でいっぱいになった靴の中がこすれて、くるぶしが痛い。皮膚が摩り切れている。すでに二時は過ぎているだろうか。家まであとどれくらいの距離だろう。

降り注ぐ銀針のような雨を浴びて、野間は歩き続けた。歩きながら何度も子供の頃の夢を見た。……小学校の校庭。仲の良かった同級生と兎小屋を覗くと、兎が鼻を動かしている。手を出してニンジンの黄緑色の葉をやった。兎はもぐもぐと口を動かす。割れた口元に白い髭がついている。「何してるの育郎。ココア入ってるわよ」気弱な声で母がいった。寒い夜に勉強をしていると母がココアを入れてくれるのだ。ここは学校の飼育小屋のはずなのに、甘く熱いチョコレート色の液体が香っている。熱いカップを手にとってみる。懐かしい匂いが辺りに満ちる。すると死んだはずの父親が、隣の宿直室で大きく咳をした。父は自分が亡くなっていることすら忘れていたらしい。なぜか小学校の宿直室で新聞をひらき、番茶を飲みつつゴホリゴホリと、野暮ったい咳をしている。この学校の用務員でもないくせに。そういえば、父が死んでもう何年になるのだろうかと思った瞬間、寒々とした嵐の夜の舗道に戻った……。

この夜、彼はどこかで休んでいてもよかったはずだ。しかし場末のホテル、安宿、カプセルホテルや深夜喫茶すら覗こうとはしなかった。一種残忍な復讐めいた妄執に駆られて、まるで自身を苛むかのように夜通し歩き続けた。これまでの憎しみを込めて、この廃物のような自分自身を歩き潰してやろうと思った。頭の中に方向感覚すらなく、いまどこを彷徨っているのかも曖昧だった。四十数年の人生の記憶を焼きつुकしたい。可もなく不可もなく、社員旅行のアルバム写真のように、無力に臆病に何の確信もなく人の顔色をうかがい、仮面のようにホホエミ続けただけの男、そいつが冷たい暴風雨の夜を亡者のように歩き続けているのだ。己の底の底まで息を詰めて沈んでいって、カチリとした芯に手で触れて、それから急いで向きを変え水面へと急浮上せねばならない。

閉じられた店の窓。ばたんばたと鳴る板。嵐の夜の住宅街には、ほとんど人影は見えなかった。呼吸が荒い。熱っぽい。野間は左右から風雨にさらされ、孤独な獣になった気がした。人間を咬み裂き民家をうろつく荒み切った手負いの獣に。

しかし彼は自己処罰の暗い牙を押し返すように「汝、己を憎むなかれ」と、呪文のように低く呟き続けた。

しばらく空を仰ぎながら歩いた。

暗いオーロラのように雨の幕が垂れ下がっている。ビルの上階は霧の中に包まれてほとんど見えない。ゆるやかな坂を登りつめると、激しい音が響いてきた。

クラシック音楽を大音響で鳴らしているのだ。雨でとぎれとぎれにしか聞こえない。大きな城壁を思わせる石堀の上に誰がいる。傘も差さずに白いツナギのような服を着た小男が、煉獄の門番か獄卒のように、ふんぞり返って座っている。年齢不詳の童顔だがごつごつした赤銅色の面立

ちで、まるで天から降ってきた鬼のようだ。頭には鉢巻きが巻かれ、しきりに両手を指揮者のように振り回していた。あぐらをかいた股で、頑丈そうなラジカセを太鼓のように抱えている。どこかで聴いた曲、ワーグナーだ。嵐の晩に壮大にして戦闘的な楽音を唸らせていた。凄まじい雨が男の頬を叩きつけている。ときおり顔を上を向け、口を蛙のようにぱくぱくと開いてみせ、雨水を飲んだ。闇の中、ラジカセは大音響で鳴り響く。ワルキューレだろうか。この狂人はこうして一晩中ワーグナーを指揮し続けるつもりなのか。

獄卒男は野間を見つけると、突然「どこから来た—」と噛みつかんばかりに叫んだ。

とまどっていると、

「おまいは、どこから来て」両手を断罪するように振り「どこへ行くんだ」と言い放った。「生まれて、死んで。生まれて、死んで。生まれて、死んで」

この嵐で気がふれたのだろう。野間は塀の下を前屈みで通り過ぎた。

「答えろ！ おまいは、どこから来て、どこへ、行くんだ？」

頭上から浴びせる怒号。ふり向きもせず急ぐ野間の背後に、リヒャルト・ワーグナーの無限旋律と稲妻の残響とが、暗い海潮音のように響いていた。

みんな台風でおかしくなってやがる一歩きながら彼は呟いた。

体が冷える。温かいココアが飲みたい。とろりとした甘く懐かしいカカオの味わい。白いクリームのかき混ぜ、ほのかに立ち上る湯気を思った。

坂の下にある公園は、蒼黒い池となっていた。桜の樹も、銀杏の樹も、ジャングルジムもシーソーも、水に浸かっている。中心の噴水のある池が豪雨であふれている。

誰も乗っていないのに、四台のブランコが風に吹かれて揺れている。見えない子供でも遊んでいるかのように、ふらり、ふらりと前後していた。吹きつける雨の中、電話ボックスと街灯の光が、周囲の水面を冷やかな藍色に照らしていた。雨に打たれる夜の公園。

ふと、風が静まると雨が垂直になった。野間は放心したかのように、しばらくブランコを眺めていた。

暗雲が閃光を放つ。一瞬光の枝を、青白い神経繊維のように走らせる。しばらくしてから、空間のすべての骨格が裂けるような物凄い音響がこだました。ビルの基礎部分まで振動させるような重低音の地響きが、なおも続いた。

野間は、公園の水たまりに入り、そのまま上を向いた。

物狂おしい気持ちが出て、にやりと笑った。舌先を伸ばし、雨を舐めた。

大気中の煤煙が、酸味となって刺激する。

公園の真ん中で野間が見上げると、周囲から小雲の群れがものものしく押し寄せてきた。雲の塊は、上になり、下になり、宙に潜む灰色の獣の集いのようであった。遙か数千メートルもの上空で、反時計回りに渦を巻きながら濃度を増していった。荒々しい怒りの雲は、中心部に真空のような明るみを湛えている。彼を品定めするかのように見下ろしていた。

怪物雲は、屋上で叫ぶ越川老人に現れた時と同じように、ばちばちと閃光を放ち、地上を威嚇した。奥の層に見えない龍でも宿っているかのように、どろどろと陰鬱にうねる。

天空のミノタウロスは彼を試すかのように、滝のような豪雨を降らせた。

際限もなく落下する雨粒は倦怠を引きはがす力があつた。それは冷たく固い真珠のような容赦のない物質であつた。豪雨は、野間の全身に生えた倦怠の繊毛を洗い流し、怠惰と感傷の皮を剥ぎ、水垢や藻のように淀みきつた憂鬱を削ぎ落とした。孤独で陰気な繭の内部に、長年栽培され続けた憂鬱が冷酷な豪雨の刃先によってえぐりとられた。

紺色の闇。コバルト色の遠景。空のあちこちで耀く雪の結晶模様のような閃光。

水面には、波紋がひろがる。二重の輪、三重の輪、それはあたかも音楽のようであつた。

空を見上げていると、あとからあとから渦潮のように、雲が寄り集まってくる。意志あるものの如く、その中心部から彼を見下ろして、じっと注視するようであつた。野間はアスペラトゥス雲の心臓部に何事かを問いかけた。

雷鳴が起こつた。極度の圧力が、上から加わってきた。目の内が青白く染まった。毛穴が開き全身が総毛立った。周囲の木立が、青白い骨の林のように立ち上がった。

体のあちこちが痙攣している。

天空で彼を凝視する怪物雲から、ぞくぞくするほどの活力が贈与された。風景は静電気を帯びて鳥肌が立つようであつた。原始的な鉱物質の贅沢な力。深山幽谷で一人滝壺に立ち、怒濤のような水を大量に浴び、爽快さに身を震わせている感覚だつた。すでに寒気は失せ、脊髄には充電されたような力が漲っていた。倦怠と痛みは去り、身体の重さすら忘れた。

しだいに渦巻き状をなしていた怪物雲の下層が、灰かに明るんできて乳液状になり、オパールのような微妙な虹色を含んだ艶のある光輝を帯びてきた。

それはあたかも大いなる神秘的な意志の力により、絹雲のような筆使いで大きな輪郭がいくつも描かれ、壮麗な雲海に積み上げられた真珠色の花卉のように、東西南北、四方八方、そして十六方向へと、放射的に立ち上がっていくかのように思われた。

野間育郎がその神秘的な祝祭の光景を、啞然として見上げていると、それら、ひとつひとつが数百メートルもあるかと思われる魚鱗めいた透明光の花びらは、やがて内部にゆっくりと婉曲しつつ、下から吹き上げてくる圧力を孕み、大きく捲れ込み、奥へ奥へと、無限に開花していくような形をとつた。それはちょうど、ビル群の林立した都市上空に、直径数キロ、いやそれ以上もあるかのような途方もない規模の荘厳な薔薇の彩雲が宿っているかのような光景であつた。いわばこの時、東京という都市は、巨大な薔薇状を成した立体的な白銀雲の膨大な層の下敷きになっていた。

――ふと、気がつくど、意識の半分が、ぼっかりと空に浮かんでいた。

自分の身体が上空の青空に、軽気球のように漂っている。

支えるものは、何もない。厚みのある雷雲の層の暗がり突き抜け、遙か下方に、巨大な灰色の渦を見下ろしている。周囲には宇宙的な畏怖を感じさせるほどの底光りする紺碧の大空が見える。その頂点に白金の神々しい太陽が、永劫を想わせる強烈な光輝を放っていた。ひっそりした無音のまばゆい光の中で、時が静止しているかのようにあつた。人間の小さな営みを超えた壮大なる空間が蒼く耀いていた。雲海の火口では群雲のうねりが上になり下になり、ゆっくりと力強く練り込まれていた。暗雲の各所で閃光が走り、壮麗な焼け跡のように幾条もの蒸気を立ち昇らせ

ている。

頭の片隅に、わずかな思惟が生じ、彼は言葉を発そうとした。その瞬間、たちまち下界の小さな肉体にひゆるひゆると吸い込まれ、雨の中の暗く固いアスファルトの上に佇んでいた。何が起こったのかわからない。一瞬の間に、何かが入れ替えられた。雨の路上に転げ落ちた一個の冷たい嬰兒として産み落とされた皮膚感覚。すべての生気が極度に集まり、はりつめた意識が精妙なガラスの球体のように感じられた。磨かれたアクアリウムのくっきりした映像。心はつるつるとした水晶球と化し、夜景はレンズを通した知覚のように、意味深く細密に映し出された。ぱらぱらと降り注ぐ雨が金色の光の粒子のように見えた。万華鏡のような鮮明な夜景のイルミネーションが広がる。

信号機や電飾などの雑多でつまらない人工照明の光すら、その光の精髓だけが抽出され、エメラルドやサファイアなどの宝石の緻密な輝きを帯びていた。知覚の解像度の極度の高まりがもたらす不可思議なる喜悦。玲瓏たる意識の水晶球体は、きしきしと透明に結晶し、夜をまるごと明晰に映し出していた。

繭玉のように彼をくるんでいた鬱の皮膜は卵のように裂け、内部から不思議な意識の球体が産出された。膜はちりちりと縮れ、嫌な匂いをさせて燃えていった。心に巣くう魑魅魍魎、暗い水垢、灰色の藻や汚泥の類がちぎれてゆく。自己破壊、自殺へと傾斜する暗く酸味を帯びた下降衝動が、どろり、どろり、と流れ落ちた。彼はしばらくの間、磨かれた知覚の水晶球の鏡面に映し出される美しい夜景を恍惚と眺めていた。

遙か上空で茫漠として怪異なアスペラトゥス雲が、地上を裁く超自然的意志そのもののよう、暗い凄みを増して覆っていた。



夜が白むとともに、雨が静かになった。

黒と黄色の溶岩流のような積層雲が、夜空を果てしなく埋めていた光景は、やがて荒れた海の陰画となり、その後には、砂丘を逆さまにしたような茫漠たる銀色の風景へと変貌した。

夜通しあれほどの乱暴狼藉を働いた怪物雲は、次第に夢のように薄らみ、ゆっくりと空の果てへと退却していった。

それは大空の悠々たる引潮のようでもあり、悪しき記憶が薄れていく治癒の過程を思わせた。

野間育郎はずぶ濡れの格好で、見覚えのある風景の中に一人立ちつくしていた。

道路には街路樹のポプラの葉が落ちていた。

濡れた緑褐色に重なり、朝の路面を覆っている。住宅の軒先や雨樋からはとめどもなく水滴がしたり、目覚めるような朝陽を輝かせた。昨夜の雨は、すでに日に温められ、水蒸気となって幾条もゆらめいている。

付近はすでに自宅近くの景色であった。すぐ向こうに薬屋があり、少し歩くとスーパーがある。長年の習性のためか、昨夜の混乱の中でも鞆だけはしっかりと抱えていた。

一彼は電話をかけることにした。携帯電話は紛失していたので公衆電話を捜した。電話ボックスが朝陽を透かし、街路樹の枝を放射状の蒼い影絵として映し出している。

最初に娘が出た。驚き、喜び、そしてヒステリックになじる声。それでも泣き笑いのような安堵の気配。次に妻が出た。彼女は同時には答えられぬ問いを連発させ、詰問の後は、喜びまじりの心配の押しつけになった。少なくとも野間育郎は、居なくてもよい人間ではなかったようだ。荒々しくも華やいだ感情の波が、電話ボックス内に金色の太陽光となって流れ込む。朝陽に照らされた彼自身の蒼い影が、ガラスを透かして舗道の煉瓦に、斜め方向に伸びていた。

そして結論——とにかく早く返って来いという。

あたりには静けさが支配していた。街路樹の梢を吹き渡る秋の微風が快い。

東京都内の路上、ビルとビルとの隙間、坂道や公園や十字路や海岸通りの汚辱が、ことごとく洗い流され、あふれる褐色の洪水とともに過酷な力で押し出された。

見慣れた街の路上が、どこか明るいゴーストタウンのメインストリートめいていた。野間はシャッターで両脇を閉ざされた路を、おずおずと歩いて行く。遠方には水色に澄んだ朝の住宅街の景色が浮かぶ。周囲には、ゴミと、木切れと、塵芥、壊れた雑貨が、きらきらとした朝日に照らされている。

ところどころに重なった濡れ落ち葉の山すら、美しい鉛色の輝きを帯びていた。遠方でも路面にまじったガラス質の粒子が、澄んだ太陽光を受け燦然としていた。鏡のような水溜まりには、白い雲がくっきりと映っている。

濡れた路上に映っている自分の影を見た。怖ろしい洪水を渡ってきた濡れそぼったかわうその姿。それはどこか異国の戦争からの帰還者のようにくたびれて見えた。

青灰色の雲は、金色の輪郭に耀き、静かに空を覆っている。遠雷が低く響く。物憂い雷は、まだ事がすべて終了したわけではないことを示すために、時おり威嚇するように鳴っていた。早朝の空にはおびただしい魚のような銀色の雲が並び、ところどころの割れ目から、黄色い光線が洩れていた。

やっと帰宅できる。

何とか夜通し営業を続けていたコンビニエンスストアで、ようやく一個のホットドッグを買い求めた。外で箱を積み上げていた若い店員が、あわててレジに戻って対応してくれた。寒さとひもじさで混乱した野間は、ふかふかとしたパンを囓った。空腹のためか沁み入るように旨い。路上から水が薄く引いていく。道の向こうで虹色に光が跳ねている。水の流れにパン屑が落ちて広がり、白い花びらのように浮いてゆく。街路樹の梢で、一羽の鴉がとても良く通る声で啼いていた。

この一帯は周辺部よりも一段低くなっており、家に向かう路地の手前で水がまた溜まっていた。踝までが完全に水に浸かり、ズボンもまくり上げなければならなかった。

路地の手前の前川家の御主人が、水に沈んだ植木鉢を家の中に運んでいた。野間に気づくと、腰に手を当てながら苦笑いをした。

「いやあ、参りましたよ。とんだ一夜でしたな。まさか、こんなことになるとはねえ」

前川氏は、まぶしそうに手の甲で顔を拭った。すでに太陽が雲から現れていた。

「これは、ご苦労様です」

「それより野間さん、どうしたんです。こんな日に午前様とは。早く戻ってお風呂にでも入らなくちゃ、唇だって、紫色だし」

隣人は手を伸ばし、彼の肩に貼りついた葉っぱを摘んだ。髪もべったりと額に貼りつき、ワイシャツもべたべたとまとわりついていていた。

挨拶もほどほどにして、また水の中を進む。疲労困憊といった状態なのに、彼はなぜか歩くことに面白みを感じていた。全身が昂揚し、血液が細かく炭酸で泡立っているような感触で、憂鬱も倦怠も、すっかり消えうせている。

一ふと気が付くと、遠く玄関で娘と妻が傘をさして立っていた。何と小さな二人だろう。それは奇蹟のように思われた。

野間は二人に頷くと、目を伏せ、御守りのように抱いた鞆に顎を押しつけるようにして、水溜まりの中を一步一步進んだ。喜ばしいような、後ろめたいような奇妙に鋭い感情が、喉に込み上げてきた。

とりわけ胸を締めつけられたのは、ちっぽけな飼犬のパロが、吠えながら怖る怖る水の中を前進してきた時であった。野間は、びしょ濡れの茶色い仔犬を、水の中から抱き上げた。このヨークシャーテリアのできそこないめ。パロは興奮して大きな目をむき、息を荒くしてもがきまわり、物凄いはしゃぎようだ。愛犬は、桃色の温かい舌で、顔を反らした主人の首を、右から左から、舐め回した。ざらざらした舌の感触と、獣臭い匂い。

溶けるように雲がひろがり、朝の光線が薄く透明に差し込み始めた。

「お父さん、どうしたの、もう！ 心配したじゃない」

泣きそうな顔をした娘は、傘を閉じて父親の肩をひっぱたいた。久しぶりの再会にしてはひどい仕打ちだ。かなり痛い。しかしどこか小動物の甘噛みのような痛さではある。

「捜索願まで出したのよ、警察に」

「早くして、由香。奥からバスタオル持ってきて」と妻がいった。

「うん、わかった」娘は長靴を脱ぎ捨て、廊下に向かった。

野間は、もたれかかるようにして玄関に崩れた。床にへたり込んだ彼は、タオルを頭から被せられ、妻にごしごしとこすられた。満子は蓄積していた感情をぶつけて「まったく！ ひどいじゃないの」といって夫の肩を左右に揺すった。オフィーリアとは似ても似つかない。野間は力なく微笑んだ。

「いま、お風呂の支度するわ。お父さん、臭くてどうしようもないんだから」

娘が憎々しげに鼻をつまんで、笑った。

何か熱いものが飲みたくないかと聞かれ、一言、ココアと答えた。

「いいわよ。でも残ってるかしら、ココアなんて」

娘はキッチンに消えた。

愛犬パロは、本日はすべてが一大事だとでもいうように、しっぽを振り振り、うれしそうに娘の後をついて廻った。

朝の光が入る浴室で、熱いシャワーを浴びた。タオルを首にかけたまま、リビングのソファにもたれて、両手を伸ばした。隣の部屋でテレビの音量が大きくなった。

「台風九号は、東北地方を北上した後、午後遅くには太平洋沖に抜ける模様です。明日には海上で温帯低気圧に変わると予想されます。昨夜から今朝にかけての雨の量は……」

東京をはじめ、関東近県各地の被害状況を流している。次第に台風の被害が明らかになってきた。それはやや雨量の多い普通の台風であった。気象予報士は特に変わったコメントは述べていない。この世の終わりでもなければ特殊な雲の出現ですらなさそうであった。

「今朝七時頃、日暮里駅近くの雑居ビルの屋上で、七十代と見られる男性と、七、八歳ぐらいの女児が死亡しているのを、ビルの警備員が発見しました」

はっとして、ソファから身を乗り出した。テレビのボリュームを大きくする。

「二人は都内の病院に運ばれましたが、男性と女児は、すでに死亡。警備員は、昨夜見回りに行った時点では、屋上には誰もいなかったとっております。警察では現在、事件性の有無についての確認を急いでいます」

彼はふらふらと立ち上がり、茫然としてカーテンを開け、外を見た。空は柔らかく澄んだ董色にまぶしく晴れ渡り、綿のような白い雲が光の輪郭を帯びていた。かすかな町の喧噪が響いている。

(お空とお話するの) 一子の幼い口調が甦る。

雷雲の下、雨霧の中に浮かぶ老預言者と天使の輪郭。彼らは一体何者だったのか。

「また、昨夜九時以降、山手線内で十三名が人身事故で亡くなった模様です。他にも幾つかの駅

で男女が線路内に立ち入り、列車の運行を妨害しました。この複数の人間による連続飛び込み事件を、警視庁では時間帯が近いことから、組織的計画的なものとして、都内のある団体との関連を調査しているところです。—ニュースを続けます」

彼はその意味に気づき、慄然とした。

「お父さん、この本濡れてるから、棄てちゃうわね」

鞆をあらためていた由香が、絵本を取り出した。

「あ、それは駄目だ」

あわてて野間の本を取り返した。少女が持っていた『神曲』の手作り絵本である。ブレイクの天使や悪魔の絵をコピーして貼り合わせた稚拙なもので、ぐっしりと濡れている。

彼はそのまま大切そうにベランダに持ってゆき、鉄製の円テーブルの上でページを開き、陽光に当てた。

鳥の群れが空の端を渡っていた。まばらな黒い胡麻粒のように、濃くなったり淡くなったりして連なってゆく。どこか東京近郊の森で昨夜の嵐を避けていた鳥たちが、ようやく戻ってきたらしい。雲の向こうにあの二人の透明な影が昇ってゆく姿を思い描いた。

けれども現実には一機のヘリコプターが、いつものようにのろのろと大気の中を這い進んでいるだけであった。

「何してるの。ココア置いてあるわよ」

彼は「ああ、ありがと」とかすれた声で応え、カップを唇に寄せた。くすんだチョコレート色の甘い飲み物。冷たい豪雨に打たれる中で、どんなにこれが飲みたかっただろう。白いクリームを溶かしたココアは、柔らかな渦を描きくるくると回っている。湯気が立ちのぼり、遠い記憶の奥の懐かしい匂いが漂ってきた。

ベランダの緑には紫サルビアの花が鮮やかだった。青紫色の小魚の群れが、緑の中を泳いでいるようであった。突き出した葉は朝露を集め、その先端から、水滴がしたたり落ち、ひとつひとつが虹色に耀いていた。

ときおり狭い坪庭にも微風が舞い込み、さわさわと葉が揺すられ、無数の水滴を燦然と散らした。

絵本の湿った紙面は、やがて朝の空気に晒されて、次第に太陽光線に温められ、数枚の白い花びらが次第に開花するかのように、ふんわりと乾いて広がった。淡い虹を帯びた蒸気の中、ブレイクの描いた透明な天使や精霊達が、幻のように紙面から天へと飛び立ってゆくようであった。

日常の営みが始まる朝のざわめきが、再び街の方から聞こえてきた。

山手線は、その日の昼前によく運転を再開した。



## アスペラトウス雲

<http://p.booklog.jp/book/21732>

著者 : grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21732>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21732>